

だしに成てはせて行

○言語同斷 維摩經九見阿闍佛品十二「不來不

去。不出不入。一切言語道斷」○注肇曰「體絕言經。

生日稍結之也。言以六度。無相爲佛。豈可得以言語

相說之乎」法華經五安樂行品十四には「言語道斷ともあ

り。

○ごんのきたのかた 「めかけ」を見よ。

○こんぶ 昆布也。今の俗に昆布をこんぶと云て。

是を祝に用るを、よろこぶの意と物にも釋し、大か

たの人も然かおもふやうなれど、祝に用ひならへる

は廣の意に取て成けり。和名抄に「本草云。昆布和

名比呂米」とあり。さて此名の意は和布荒布等に對

て、やゝ廣きものなれば、廣布のよし也。

○こんめいちのしやうじ 「しやうじ」を見よ。

○建立 後漢書四卷徐防傳「上疏曰云々。漢承

亂秦。經典廢紀。本文略存。或無章句。收拾缺建立

門經」今これをものゝ取立勸進する方にいふは、本

堂建立の方より轉じたる也。かの普請と云が、家造

の事となれると同斷なり。

さノ部

○さア さア／＼ いざさせ 古事記傳、

明宮段云「伊邪佐々婆は人を誘ひ起るを、伊邪佐須

といふ。萬葉十四に「安左乎良乎遠家爾布須左爾宇

麻受留母安須伎西佐米也伊射西乎騰許爾」この伊射

西は伊邪佐世にて、いざ／＼小床にと女を誘へる言

なり。中昔に人を誘ひたつる言に「伊邪佐世賜問」と

云ると同じ」とあり。俗言にさアとも、さア／＼と

も云、皆此いざの省かれるなり。又狂言詞にさアそ

れはなどいふは、然の約れる佐にして、これとはも

とより別言也。混すべからず。榮花玉臺に「さいいま

なん、出侍りつるしばしおはせよ」とあるは、いざ

の伊をはぶけるなるべし。

○西行法師の傳 隱逸傳卷下（不可思議撰とある

は深草元政上人也）曰「西行者武衛校尉康清子。

藤秀郷九世孫也。俗諱憲清。少而讀書習管絃。最

精弓馬。特達和歌。嘗出奥州。仕天仁上皇。每

應制獻和歌。恩遇日渥。西行素有出樊籠之心。上。保延三年終遂志。自遊天下。文治二年秋偶赴

奥州路歴鎌倉而過鶴岡。八月望頼朝詣鶴岡祠。有_二一老僧_一立_三華表下_一。頼朝恠而使_二問_レ之_一。西行答以_レ實。頼朝疾遠而延_三西行_一因談而問_二和歌及弓馬之道_一。西行對曰某俗時雖承_三箕裘_一逃世後廢置了。和歌者遇_二花月感_一僅成_三三十一字_一耳。無_レ知其奧旨也。頼朝懇問弗措。於是西行告以_二弓馬之事_一。乃命_二俊兼_一記_レ之_レ歎話盡夕明日至_二午而退_一。頼朝頻留不_レ止。臨_レ歸賜以_二銀猫_一。西行拜而受_レ之。及_レ出_二榮門_一便與_二遊兒_一而去。高雄文覺恒聞_二西行爲_レ人而嫉之。謂_二遁世之士當_レ一_三於道_一。易事_二咏歌_一浮_二遊四方_一乎。可_レ憎尙或相見。吾擊_レ頭破而已。從弟權_レ之相語曰。西行者天下之聞人也。設有_レ及_レ此我等當_レ如_レ之何。一日西行遊_二高雄山_一。日暮矣。叩_二文覺之房_一而乞_レ宿。文覺悅甚以爲_レ遂_レ得_二夙志_一也。乃張_二拳啓_レ戶而熟視。肅然斂_レ手迎接。既而曰。久聞_二芳名_一。今日相見爲_二幸甚_一。欣然共語不_レ覺_二更闌_一。翌日進_二齋而西行既歸_一。徒弟進曰。上人盍踐_二言乎_一。文覺曰。汝等不_レ見_二彼眼狀乎_一。彼豈殿_レ於我_レ乎。反殿_レ我者也。西行嘗曰。和歌者禪定之修行也。又曰。我由_二和歌得_レ佛法_一也。常願佛涅槃日於_二花下_一死。仍作_二和歌記_レ之。果以_二

建久九年二月十五日卒_{年表錄云}。案に、いづれの書も保延三年八月遁世とあれど、西行四季物語によれば大治二年のころとしらるゝ也。されば廿五歳の時とみゆ。堀川院の康和五年に生れ、鳥羽院御即位の時_{七十三代}は御同年にて、西行も六歳なるべし。御在位十六年_{廿二}。翌年崇徳院御即位ありて、四年目の大治二年遁世なれば廿五歳なるべし_{保延三年は十一年後入寂は諸傳の如くならば建久九年、九十六歳なり。遁世は自の撰集抄に長承の末と侍り。古今著聞、十五「西行法師出家以前は徳大寺左大臣の家人にて侍りけり。よて多年修行の後都に歸りとし頃の云々」東鏡、六「建久九年二月十五日往生云々」}

系圖

藤成 <small>伊勢守從五位下 魚名公五男</small>	豐澤 <small>從四位</small>	村雄 <small>左衛門尉 從五位上</small>
秀郷 <small>後藤太 從四位上</small>	干常 <small>從五位上 將軍</small>	文脩 <small>將軍</small>
文行	公光	公清
季清	康清 <small>左兵衛尉</small>	憲清 <small>下北面 西行</small>

墓所は未詳。江州參濃の境に大くらの宿、東の山上五丁計西に、上人の墓とて大石ありといふ。また慈雲といふ僧、聖人の墓所難知故石山寺に七夜參籠。觀音以陰語告給ふ。翌日於河内國山中得其驗立石碑結庵於石川郡弘河寺舊蹟筆_二其由_一種花記と號して、世に行はる。法名圓位_{千載集}號_{此名}大實坊_{亦名}西行_{古新}

○細工 榮花「ひかしかののみこといひし人こそ、細工はかしこかりけれ云々」賀陽親王は、桓武天皇第七皇子、母夫人多治比氏二品治部卿、貞觀十三年十月八日薨。或抄に三品治部卿とあるは誤也。齊衡二年正月に二品となり給へり。伊勢物語に「ひかし賀陽のみこと申みこおはしましけり。そのみこ女をおぼしめして、かしこくめみつかう給ひける」貫之集に、天慶六年正月、藤大納言御せうそに「年比ありつる魚袋をつくるはせんとて、細工に給へるを、おそくもてくるあひだに、日ちかくなりしかば」○さいく細々 貞徳の書る物に「たれもく心易くおもひて細々ある事也云々」豊太閤の消息文にも「さいく」と假名にて書玉へり。さて貞徳の書には細

々と書たれども、言文のついきをおもふに、前々といふかゝり也。さればもとは前々といふを、音便にさいくといひなせるなるべし。

○在々處々 涅槃經云「在々處々常清淨」悲華經云「有_二衆生_一在々處々聞_二此法聲_一」金剛經曰「須_二菩提在々處々_一」維摩經曰「在々處々城邑」

○さいざう 「まんざい」を見よ。

○催促 後漢書六十九楊倫傳「詔書勅司隸。催促發遣」白氏文集廿三「冬裘夏葛相催促。垂老光陰速似飛」

○さいづちあたまた 太秦牛祭文に「然留間柎槌頭仁木冠乎戴支」

○さいなまる 會禰好忠集に「圓融院の御子の日のひめしなくてまわりたりとて、さいなまれて、又の日奉りける」

○さいなむ おちくば物語一ノ上「常に入居れば切なむ事かぎりなし」同一ノ下「北のかた切なみだちにたり」案に、催馬樂に「何爲に、いかにせん、をしのかもとりのいで、ゆけば、おやはありくとさいなめど、夜妻はさだめつや、ささんだちや」空穗樓上下

「いみじうわらひ給ひて、かんだうはなかなたこそはさいなまめとて、物もおほえすゑはし給へり」源氏、若紫に、いぬきが雀の子をにがしたる所に「例の心なしのかゝるわざをして、さいなまるゝこそいと心づきなけれ云々」注に「罪サイナム、常に心なく麁相なるものゝ、かやうの事をして、折檻せらるゝよといふなり」とあり。

○さいはひ 紫日記上四「人のほどよりはさいはひこよなくをられ給へるなめりかし」

○材不材 莊子云「周將處、夫材與不材之間、ふ薪をさいまきといふ。割薪のこゝろ也。空穂禁使「御せんの御さいまつともしたる兵衛のせうども、にはかにいるにおどろき見給ふ」落くば清水詣の所に、さいまつのすさかげにて車のうち見えたる事有。是も割松也。薪は燃木の約轉也。

○さいまくる 枕草子二「にくき物、物がたりなどするに、さし出て我ひとりさいまくるもの、すべてさしいではわらはもおとなもいとにくし」同十七段「物語などするに、われ獨さいまくるものすべてさ

し出は「濱松二」さすがなるさかしら心のきは高くさいまくれたるやうなる、かへりてはうたてありや」案に、才枉の意にはあらず。サイは才にて、ガルは清音にて、才の詞につけていふ俗言也。俗に人をいひまくる、又追まるといふまくるにおなじ。多言なるをいふもこの意也。

○箏 體源抄曰「箏は我朝に傳はることは、仁明天皇の御時に、遣唐使の准判官掃部頭眞敏熊承武が娘に、傳はると云。或は内教坊の妓女命婦石川色子、筑紫の彦の山にして唐人にこれを傳はると見えたり」とも云。いづれかまことならん。

○さうか 「よたか」を見よ。
○雑戯猿樂 禁秘抄中、可遠凡賤事「凡卑限六位藏人下臈女房也。有藝者依其事。近召事近代多。寛平遺誠不可然。况如猿樂、參庭上可止事也」太平記三十持明院殿吉野遷幸事「三度天台座主ニ成セ給ヒシカバ、門跡ノ富貴無雙。御門徒ノ群集如雲師子田樂猿樂ヲ被召、日夜ニ舞歌ハセ、茶飲連歌仕ヲ集テ、朝夕遊ビ與セサセ給シカバ、世ノ譏リ、山門ノ認ハ止時無リシカ共、御心ノ中ノ樂ミハ

類ヒ非ジトミエタリシニ」また三十 公家武家榮枯易地事「我人ニ勝レント様ヲカへ、數ヲ盡シテ如山積重ヌ。ナレバ其費幾千ト云事ヲ不知。是ヲモセメテ取テ歸ラバ互ニ以レ此彼ニ替タル物共スベシ。トモニツレタル通世者、見物ノ爲ニ集ル田樂猿樂傾城白拍子ナンドニ皆クテ、手ヲ空シク歸シカバ、中略又博奕ヲシテ遊ケルニ、立ニ五貫十貫立ケレバ、一夜ノ勝負ニ五六千貫負ル人ノミ有テ、百貫トモ勝人ハナシ。此モ田樂猿樂傾城白拍子ニ賦リ捨ケル故也」また三十 大内介降參事ハ在京ノ間、數万貫ノ錢賃、新渡ノ唐物等、美ヲ盡シテ奉行頭人、評定衆傾城、田樂、猿樂、通世者マデ是ヲ引與ヘケル間、此人ニ増ル御用人有マシト、未見エタルコトモナキ先ニ譽ヌ人コソ無リケレ。世上ノ毀譽非善惡、人間ノ用捨在ニ貧福トハ今ノ時ヲ申ベキ」庭訓往來云「獵師、狩人、猿樂、田樂、師子舞、傀儡子、琵琶法師、縣御子、傾城、白拍子、遊女、夜發童」凡此等に云る猿樂は、街衢を徘徊せし賤き雜戲にして、かの神樂の猿樂と尊卑の隔遙にことなり。猶其名は一ツにして、其實の同じからざる物多かり。田樂も

國史に載る所の小墾田儂、田儂等とは別也。師子舞も江次第に出せるとはこと也。或人問云「時代に依て同じ名の物の異なるはある事なれども、右の猿樂などは宇治拾遺著聞集に相混じたりといはるゝ、もし同じ時世に然か混じたらんには、其稱へ紛はしき事あらん」答云「今世に此差別をいはん、太神樂と呼たらんとて、いかでか神社の神樂と紛るべけん。大夫といふ名目に諸大夫、士大夫、淨瑠璃の大夫あれども、紛るゝ事もなし。猶此類ひいと多かるをおもふべし」
○象牙 拾遺集物名すけみ「いかりのいしをくゝみてかみこしはささのきにこそおとらざりけれ」
○雜言さうこん 明月記「文曆二年三月廿八日。須臾之間猶可見由被救實公仰。又令取給之間。御氣色忽然變種々雜言。大略如例。喚御體不安高聲憚外聞」
○さうくし 雅語に云は、寂寞の意にて、さびくしと重ねたるを、音便にさうくしといふ也。伊勢集「大和に三月ばかりにすむに、さうくしくて、寺めぐりせんとおもひてありさける。りう

もむといふ寺にまうで、云々」源氏桐壺若き入々か
なしきことは更にもいはず、うちねたりを朝夕にな
らひていとさうくしく」

○造作 明月記「天福二年八月五日。一昨日火
事實説、鳥丸西油小路東七條坊門南八條坊門北拂地
焼亡土倉不知員數。商賈充滿。海内之財貨只在其所
云々。黄金之中登爲其取翌日皆造作云々」

○さうし冊子 雙紙 拾玉集與書「雙紙」萬代集
雜「五人の雙紙をかへせ」

○宗匠 唐書曰「權德輿字載之天水。洛陽人。
父皐。天寶中祿山使之獻俘京師。皐察祿山有異
志詐死逃逸。由是名聞天下。德輿四歲。能屬詩。
七歲居父喪。以孝聞。後以禮部尚書平章事。自
貞元至三元和三十年間羽儀朝行。直亮寬恕動作語
言一無外飾。蘊籍風流爲時稱嚮於述作特盛。
六經百氏游泳漸漬。其文雅正而弘博。王侯將相泊當時
名人薨沒。以銘記請者什八九。時爲宗匠焉」この
宗匠といふは唐の比よりはじまれるなるべし。

○葬送の跡を掃 台記「久壽二年十二月十七日。
傳聞。今夜亥刻高陽院入棺云々。即奉遷福勝院」

云々。世御之後民部大夫重成以竹箒拂御所」
○早卒露膽 拾玉集二「都遠がらぬ山寺にをさ
なき兒有り云々。十二月十二日中の時ばかりより
十三日午時ばかりまでに、それもひきついでてもな
く、ひまへにてよみはてたりける云々。さて此百
首の名をば早卒露膽の百首と名づけてぞ披露しけ
る」

○騒動さうどう 後漢書卅六陳忠傳「又霖雨積時河
水涌溢。百姓騒動」淮南子二十秦族訓「外内騒動。百
姓罷弊」

○雜煮 御厨子所預紀宗國記「明應六年十二月
七日取三献公家衆ボウゾウ」とあり。これ煮雜の音
にて、今の雜煮とおなじ事也。

○さうばん 江戸にて佛堂におきて、念佛に合
せて鉦をならすをさうばんを打といふは、早晚にて
且暮勤行のかたより移したる唱へなり。

○草履 尻切 足半 建武年中舊記「於陳
中可加制止條々之中一著草履事」義經記二「鬼一法
眼これをきゝて、けなげものならば行て對面せんと
て出立。すゞしの直垂に緋おどしの腹巻きて、草履

をはき、頭巾耳のきはまで引こうて、大手録を杖に
つきて云々」白氏文集廿八行香歸律「出行行香客。歸
如坐夏僧。狀前双草履。簷下一紗燈」(しりきれば
草履の尻のなきにて、今俗の足半といふ類なるべし)
源平盛衰記「相國は素絹の衣を着、尻切はき、長念
珠しる手にきて、聖柄の刀さし」今昔物語一「寛
運この者にはものいはぬぞよきと思ひて、尻切はき
もあへずにげ出て、仁和寺にかへり」

○さおり 徹正記物語に「旅ゆけばさおりの田
うたぐにによりとところにつけて聲ぞかはれる」注云、
さおりは五月におるもの也案に、さは植るをいふ也。され
ば植つけに田におりたちて田歌をうたふをいふなる
べし。さをとめ 五月さす柳さす竹のさもおなじ
こゝろ也。

○左降 「させん」を見よ。

○さか髪をとる 竹取「御むかへにこん人をば
長き爪してまなこをつかみつぶさん、さか髪をと
てかなぐりおとさん」

○さかさま 空穂只「そ」かのゆひごんをおもへ
ば、世をさかさまになさんといふも、心にかなふも

のならば、まかせみんとおもふ」
○さかしき この詞、その用ひさま多かり。先
八千矛神の御歌に「遠々しこしの國に佐加志賣遠あ
りときかして、久波志賣遠ありときこして」とある
佐加志も久波志も共に美言にて、たゞ好女のよし
也。書紀、仁徳卷に「賢此云左河之」崇神卷に「數
智」土佐日記に「こと人々のもありけれど、さかし
きもなかるべし」これらも賢き方にて、猶よきをい
ふ也。又女のさかしきなどいふは、よからぬ方也。
又さかしら、さかしらだちてなどいふは、殊にあし
きをいふ也。今俗に云は、大かた小才覺のある方也。
○さがす 一 空穂只「そ」さうぞくなども皆さがし
とりて、かしこに待るもの、同祭使「人のきぬをは
ぎとりいひさげをさがしはむ」この外物をさぐり求
るをさがすといふ詞は、榮花浦々の別の卷にもみ
ゆ。

○さかづき 詩大雅、行葦篇廿六注。夏曰醜。

○さかづき 伊勢物語「かたのをかりて、
天の川のほとりにいたるをだいにうたよみて、さ

かづきはさせとのたまひければ」

○盃のそこを捨る 擬當、字彙、擬魚慶切。冰堅也。當丁浪切底也。魚道妙壽、下學集云、「魚道建殘盃也。以餘瀝洗殘盃痕。喻之魚過舊道。故云魚道也。魚雖游泳大海、終不忘舊道。者是又出所未詳」

○さかな肴 夫木抄廿二雜源伸正「しのはらやさのく、たちさかなにて旅行人をしひとめめばや」伊勢物語「かはらけとりていだしたりけるに、さかななりけるたち花をとりて」催馬樂「みさかなはなによけん」これら俗にいふ酒のなとなるを、肴といふとおなじ。(猶「な」を参照せよ。)

○さがにくき世 拾遺、雜秋、遍昭「こゝにしもなに匂ふらん女郎花人のものいひさがにくき世に」後撰戀一よみ人しらす「立かへりぬるればひぬるさがなればいくたの浦のさがと社見れ」大和物語「をばのみこゝろさがなくあしき事をいひきかせければ」

○さかひの松 夫木抄、八夏、西行上人「誰かたに心さすらんほとゝぎすさかひの松のうれになく

なり」

○さかまく水 新撰字鏡下「濃瀧水廻復也。流水轉廻也。佐加万支」また「流濱波廻轉之貌。佐加万支」

○さかもぎ 夫木抄卅六、後九條内大臣「山ふかくやへのさかも木ひくともよのうき事は猶をかよはん」同廿一、俊成「よの中はせきとにふせぐさかも木のもがればてぬる身にこそ有ければ」

○酒屋 萬葉十六下「階楯熊來酒屋爾眞奴良留奴和之」催馬樂「此との、おくのさかやのうはたまり云々」これは殿の奥の酒舎をいふなれど、今酒をうる家を酒屋といふも、ことはおなじかるべし。

○さかやけ 今額毛を剃るをさかやけするといふは、界毛の訛りなり。額毛を界毛といふよしは、先古へは公家武家はいふも更なり。農商の輩も皆惣髪にて、額を鑷子にて丸く半月の如くに抜し也。即月額とかくも此故ぞかし。さて然か丸く抜とる際の毛を、界毛とて美くものして、大切にせし也。さて僧はやくより落髮せんの心なれば、多くは此角を

抜入す。もし年闕て入道せし僧には、もとの界毛の跡のつくる故に、さかやけのあとのつくる僧といふことの有也。月代とかくも、剃たる上より義を以て書そめたる字也。又山伏も髪はあれども、此角を抜入す有し故に、太平記に似せ山伏の事を「頭巾を取れば額の角の入しが顯はれたり」とはいへる也。さて此月代の上を皆剃事となりしは、いつの比よりか初りしといふに、普通の説に織田家の夏陳の時、甲の内むれて上氣するを、軍兵苦しがりて剃はじめたりといへる、さも有べし。それも一旦にしかせしにもあらず。この始は京都將軍家の末にも既に其愁ひありて、中剃をしそめたるが、追々に廣く剃てつひに額髪を皆剃事とはなりし也。かゝればそれより以前に月代といへる事のこれかれあるは、其額に付ていふか、又僧などのかしらに角入の跡あるにつきていへるにて、いまだ今の俗のさまなるを云しにはあらぬ也。貝原氏の和爾雅の説は誤也。玉海一名

月輪兼實 安元二年七月八日「建春門院崩御之記。自今日記 件隆中一時忠卿出首御髪不正月代太見苦而色殊損示左大臣以下」撰集抄「あさましくやつれたる僧の、近く家

を出にけると見えて、月代などあざやかに見えたり」

太平記五大塔宮熊野落之事「其時宮木守相摸にきと御目くばせ有ければ、相摸この兵衛がそばに居寄て今は何をか隠し申べき。あの先達の御房こそ、大塔宮にて御座候といひければ、此兵衛猶も不審げにて、かれこれの顔をつくく」とまもりけるに、片岡八郎、矢田彦七、あらあつやと頭巾をぬぎそばにさしおく。實の山伏ならねば、さかやきの跡かくれなし。兵衛これを見て、げにも山伏にておはせざり、かしくぞ此事申し出たりける、あな淺まし。此程のふるまひさこそ尾籠に思召さふらひつらんと、以の外に驚きて、頭を地につけ手をつかね、疊よりおりて蹲居せり」砂石集六「月額ある入道」

○さがる 「さがる」を見よ。

○逆夢 榮花玉のかざり「たゝしにまうけをせよと、ゆめに見給ひければ中略僧正などてか夢はさみゆれば、いのちながしとこそ申せ」

○さがりば 源氏少女御くしのさがりばかんざしなどのあてに「狭衣二上世三すぢのをかしさつやさがりばなどはたぐひあらじかし」源氏夕脱同

「さがりば肩のほどいときよげに」
 ○さかろ 夫木抄廿六、西行上人「さかろおすたていし崎の白波はあらしほにもかゝりけるかな」

○左義帳 辨内侍日記「建長三年正月申略十六日にさぎてうやかれしに、たれもく参りしかども」案に、四季物語一正月十五日の條、徒然草四段薩戒記應永卅三年正月十四日の條等に出たれど、其本義を見るにたえざれば、今略之。東山年中行事正月十五日條「きてう三毬打とも書之。此爆竹は今朝御對面相過て、則碗飯より以前之事也。御對面松の御庭にてさぎてう躍申候へる、籠中より被御覽候。御借衆中衆衆庭上にて祇候也」中原康富記「嘉吉四年正月十五日。三毬打三本如例年致沙汰令燒之」國朝佳節錄曰「本朝正月十四日。撤門前松竹。十五日曉燒之。以爲嘉事。小兒等向火相唱曰「東土爆竹」筵響錄下曰「正月禁中に三毬打と申事有之。何故に三毬打と申候哉。公事を被行候時。夜に入候へども陣の坐といふ所に結び燈臺といふものをたて、燈を設け、其體細き木三本の末をつなぎ合せて、又にして

下を張せ、其上に油つぎを置、燈臺と申候。昔の記録には三木張とも三叉杖とも有之は、其貌△△如此なる故に、三木張とも三叉杖などいふと見えたり。當時の三毬打もそのかたち相にたれば、三木張といふ心なるを、後世文字もいろく書、かたちもかはり、さまざまの説も有之候様に被存候。愚存如此候也」以上といへる、此説の如き也。是を本義として、家々の松かさりを焼すつる事になりて、種々に轉じたる也。今も田舎にては一村の松かさりを一つにつめて、十四日の夕さり焼之。これをどんどといふは、小兒詞にて、とんとの燃立つよりいふなるべし。
 ○さくく 宇治拾遺二「きたなげなき女どもの、しろくあたらしき桶に水をいれて、此釜にさくく」といふ。何ぞゆわかすかと思れば、此水と見るはみせんなりけり」

○さくら鯛 夫木抄、廿七、權僧正公朝「さくら鯛花の名なれば青柳のいとをたれてや人のつりけん」

○さくり こは多部「たくり」の條に出。
 ○さぐりえて 夫木抄、十四秋前中納言定嗣「さぐりえてそのひともしぞあらはる箱をひらける菊のことのは」

○さくりもよくとなく 蜻蛉日記中「かたちこにても、京にある人こそはと思へど、それなんいともしかしよう見ゆることなれば、かくおもふといへばいらへもせで、さくりもよくとなく。さて五日ばかりにきよまはりぬれば堂にのぼりぬ」

○さぐる探 古今集物名「かづげども波のなかにはさぐらで風ふくことうさしづむたま」萬葉四「おどろきてかきさぐれども」十二「おきてさぐるになきがさぶし」十三「なく兒なすゆきとりさぐり」

○左官 魯齋全書に「塙匠」東京夢華錄に「巧塙者」これ今の左官なり。
 ○さけ 保憲女集詞書に「さけといふいをの

冬出くれば」今昔卅五「枯鮭ヲ太刀ニ帶ケテ」

○さげ尼 新六帖二、衣笠内大臣「黒髪のいろはかはらぬさげ尼のまことの筋に身はなびきつ」

○さげすむ 「さみする」を見よ。
 ○酒にゑひて泥となる 本朝怪談六「東國の俗語に酒にゑひたるものを泥とよぶは、李太白詩集云「三百六十日月醉如泥」此説によりていひ出せる也」

○酒のみする 是は歌をよむを、神代紀に「うたよみしたまはく」と訓たると同例のいひざまにて酒呑といふを體語になしてするといふ也。伊勢物語に「もみちの千くささみにゆるをり、みこたちおはしまして、よひとよ酒のみして遊びて」

○酒はやし 今酒店の軒に杉葉を圓かに束ねて、それを酒はやしとも酒葉ともいふ。一休和尚が家集に「極樂をいづこにありと思ひしに酒葉立たるよも作が門」とよまれたる是也。こはもと三輪の杉より出たりといふ。むかしは酒店の門ごとに有しを今も田舎にてもまれくならではあらぬ也。

○さけぶ 猿におほくよめれど、鹿にはいと

めづらし。後拾遺集、秋上、長能「宮城のにつまとふ鹿ぞさげふなるもとあらの萩に露や寒けき」
○さげらるゝ 夫木抄卅二、光俊朝臣「年をへて世にすゝけたるいよすだれかけさげられて身をば捨てき」

○さげる さがる これ今の俗に「手にさげる」「腰にさげる」などいふこゝろ也。神樂譜、取物篠「此さゝはいづこの笹ぞ、とねりらが、こしにさがれる、柄をかかさゝ、又斲ししろがねの目貫の太刀をさげはきて」

○さご魚名 今雑字と書て、雑魚の名と心得たるやうなれど、もとは小魚の名なりけん。新撰字鏡に「鈔素戈反。知々夫。又伊佐々古」とあり。少細子の意也。此いさゝ子を上略してさごと云けんを、雑字を填て誤りしなるべし。

○左近櫻 江談抄云「内裏紫宸殿南庭櫻橋樹者舊跡也。伴橋樹地者昔遷都以前橋本大夫宅也」拾芥抄云「南殿前庭櫻樹者本是梅也。桓武天皇遷都之日所被植也。而及承和年中、枯失。仍仁明天皇被改植一也云々」

縣主祖五十述手が獻りけるも専ら右の越き也。伊勢物語下七段、むかし田村のみかど、申すみかどおはしましけり。その時の女御にたかき子と申すいまそかりけり。それうせたまひてのち安祥寺にて御わざしけり。人々さゝげもの奉りけり。奉りあつめたるさげものちさゝげばかり有り。そくばくのさゝげものを木の枝につけて、だうの前にたてれば、山もさらだうのまへにうごき出たるやうになん見えける。それを右大將にいまそかりけるふち原のつねゆきと申いまそかりて、講の終るほどにうたよむ人々をめしあつめて、春の心ばへあるうた奉らせ給ふ。右の馬頭なりける翁めはたがひながらよみける「山もみなうつりてけふにあふ事は春のわかれをとよとなるべし云々」大和物語に「故源大納言幸相におはしける時、京極のみやす所亭子院の御賀つかうまつり給ふとて、かゝる事せん」とさゝげもの一枝二枝せさせ給へと聞え給うければ云々」松蔭納中言物語に「女院より白きひと八十かさねに、するしやうのすゝにこがねしやうをくしたるを、しろがねのはちすのつくり枝につけてまゐらせ給ふ。其外のさゝげも

○さゝ 榮花五十五「さゝとみさわげば」同五十七「女房たち何となくさとわらふ」空穂祭使「えねんせす。ひとだびにさとわらふ聲のす」後撰戀四「夜明てかへりけるを、人見てさゝやきければ」これらいづれも俗にいふ蕪の意なり。

○さゝぐりはらゝ 夫木抄、三十雜寂然法師「山かせに峯のさゝぐりはらゝと庭におちくる大原のさと」

○さゝげたてまつる さゝげは指上の中略にて、たてまつるは立奉入タテマツルイの義也。古くは天皇また神佛其外貴人へ物をまゐらするに、賢木の枝につけて指上て奉りける故に、さゝげとも、さゝげ奉るともいへる也。たてまつる立も、其樹を立てまたすよし也。その本は古事記上岩屋戸段に「天香山之五百津真賢木矣。根許士爾許士而。於上枝一取一著八尺勾穂之五百津之御頂麻流之玉。於中枝一取一繁八尺鏡。於下枝一取一垂白丹寸手青丹寸手而。此種々物者布刀玉命布刀御幣登取持而云々」景行紀に、神夏磯媛の天皇に獻り給ふ捧物、又仲哀紀に、岡縣主祖熊鷹が、天皇に獻りたる捧物、又同紀に、筑紫伊觀

の山のうごき出たらんやうに見ゆるに云々」
○さゝげものにしてかしづく 拾遺哀傷「女院御八講捧物にかねしてかめのかたを作りてよみ侍ける」
○さゝめ 堀川百首、中宮權大進「月清み明の原の夕露にさゝめわける衣さぬれぬ」これは草の名にして、さゝめの箋ともよめり。
○さゝめく 「さゝやく」を見よ。
○さゝめごと 藤原爲忠朝臣集「うらやまし今宵はあはん七夕のさゝめごとせんつものことのは」
○さゝやく さゝめく 萬葉七三十一「人ぞさゝめきし」竹取物語「猶ものおぼす事有べしとさゝやく、おやをはじめ何事ともしらす」これ私言也。靈異記に唾をよめり。落くば一ノ下「よろこび給うて囁めささわき給ひて」
○さゝら 榮花御撰者「ふえふさゝらといふものつきさま」の舞「今昔廿八」サ、ヲヲツキ枱ヲ差テ様々ノ田樂ヲ」職人歌合「サ、ヲ、ラ、ズリ」
○さゝるゝ 落窪「われに臨時の祭の舞人に差れたまひければ」

○さしあげ 「ほうもつ」を見よ。

○さしあひ 俗に故障をいひ、兩端にかゝれるをいひ、略てはさしがあるともいへり。むかしもいひし詞也。明月記「文曆二年二月十八日。今明自身毎日有指合事。廿一日進由示之仍止了」續後撰集十二「戀たのめける男さしあふことありて、いのちあらば、あすの夜かならずと申たりけるかへりごととに三條院女藏人「をしからぬいのちは我もゆづりてん頼むることを誰に見せまし」新古今雜一「さしあふ事ありてとまりて」榮花とりの「よろづさしあひものさわがしく」玉葉、秋下「紅葉御らんせらるべしとて待ける日、さしあふ事ありてのびにければ」

○さしかはす 金葉集卷左兵衛督實能「この春はのどかに句へ櫻花枝さしかはす松のしるしに」

○さしぐし 催馬樂、挿櫛「さしぐしはとうまりなくつありしかと云々」刺櫛といふを、體語によべるなり。

○さし過人 源氏夢「例のものめでのさし過人」

同淨舟「此子はこゝちなうさし過てはべり」

○さし出ぐち 枕冊子二にくき物「物がたりなど

するに、さし出て我ひとりさいまくるものすべてさしいでばわらはもおとなもいとくし」

○さしなべ 萬葉十六十七「刺名倍爾湯和可世子等」

○さし荷につむ 夫木抄、卅三、俊頼朝臣「戀しさをさしに、つめる舟なればかちもみとろくこゝろせよ波」

○さしはへて 大和物語「さしはへいづこともなく來つれば」空穂藤原君「それをさしはへていはんとて」永久四年百首、肥後「いなり坂しるしの杉のさしはへておもふ心をねぎぞかねつる」拾遺、戀一よみ人しらす「玉江こぐこもかり舟のさしはへて波まもあらばよらんとぞおもふ」源氏宿木「またこゝにさしはへておとなはず侍めり」こはこゝろざして、わざとするをいふ也。

○さしみ 康富記「文安五年八月十五日云々

「二献冷麵居之。鯛指身居之」

○さす 「たて」を見よ。

○さすが 今の世にては、唯小刀の名と覺えたれど、古へは火打袋の刺柄に著たる小刀の名なりし

也。後撰集に「みちのくにへまかりける人に、火打を遣はすとて書付ける、貫之「をりく」に打てたく火の烟あらば心さすがをしのべとぞおもふ」爲家卿抄に「さすがは腰刀也。燧につくる物也」とあり。がとはよすがなどいふがにて、俗の懸り代をいふ。此外何にても物を取付て、そのかゝり柄として腰に刺刀を、腰刀といふ也。盛衰記四十四日本武尊の錦燧袋の事をいへる處に「今世までも人の腰刀に錦の赤皮を下て、燧袋といふことは此故なり」とあり。

○さすぎ 榮花ものしづく「二條のさじきどのに

わたり給ひぬ」同玉葉「おほのみかど焼にし後は、此さじきどのに、中納言どの住給ふに」今物見る料に構へたる床を、さじきといふ。この語に燧敷の字を填てさんじきと覺えたるはひが事也。されどもさすぎの名はいとふるし。神代紀に「作假殿八間」と書て「假殿此云佐受枳」とあり。神功紀、雄略紀にもみゆ。また小右記に「狹敷」園太曆に「棧布」庭訓往來に「棧敷」などはいづれも字を假名書にしづめたるにて、この意には叶はず。こは杖敷のこゝろなるべし。杖をわたして、其上に板を敷て作るも

のなれば也。

○さすらへ 空穂としかげ「とら、おほかみ、くま、けたものにまじりさすらへて」大和物語 十段

「さてとかう女さすらへて」

○左遷 左轉 左降 或人間「貴人の流罪を左遷といふはいかなるよしか」答云、此詞はもと

は時代の制によりて、右を尊みし代に、左へうつるは、身をおとすなれば、やがて罰の名とせしを、いつしか時世の沿革をいひはで、只官位をおとさるゝ事とはせしなり。されば左降などもいへり。かくてわが皇朝には右を下とし、左を上とすれば、此詞

あたられざれど、もと漢文よりいひならはして、そのまゝ詞となりし也。後漢書卅九周榮傳に「左轉」と書たり。漢の此時も左を貴びたれど、たゞ世のいひならはしに隨て也。なほ此左遷、左降の事は、野客叢書、留青日札、戴氏鼠璞、諸說辨斷十八丁等に委し。披き見べし。淮南子「總稱訓凡高者貴其左」左旋

故下之於上曰左之。臣辭也。臣下者貴其右。故上之於下曰右之君讓則失其所尊。再遷故失其尊。臣右遷。則失其所貴矣。以再遷故失其貴。小快害道斯須害儀」

○さぞ 萬代集、冬、爲家「あしろ守さぞ寒からし衣手の田上川もこほる霜夜は」これ俗にいふさぞに近し。

○さそふ 新撰字鏡云「佐伊佐奈不又佐曾不」と定より出たる語なり。されば評定人を沙汰人ともいへるもこの意なり。さるを沙汰の字の音とおもふはひが事也。されど沙汰とつゞきたる字面もあるがめづらしければ、左に舉おく也。續一切經希麟音義

十「沙汰上音所加反切韻。沙亦汰也。下音太。考聲云。濤汰洗也。案沙汰即如沙中濤其金。取精妙者也」

○さだむ 源氏竹河「よそにてはもき木なりとやさだむらん下に匂へるうめの初花」

○さてく 榮花者「さてく」とひきこえさせ給ひて「こは今俗にいふ、ソシテドウダといふこゝろ也。

○さてん 「させん」を見よ。
○里神樂 夫木抄、十八冬、入道前太政大臣「山もとやいづくとしらぬ里かぐら聲する杜は宮のなる

べし」
○佐渡の金 宇治拾遺に、能登國に鐵をとる者佐渡國にこがねの花咲たるところ有といひて、金八千兩ばかりとりて、能登守さねふさに奉りたる事見えたり。
○さとの 金葉集雜三宮輔仁親王「見しまゝに我はさとりをえてしかばしらせとるとしらざらめやは」

○さのぼる 「さひらき」を見よ。
○さばく 夫木抄八、夏、參議忠基「うがひ船ちかふ手なほをさばくとてもしぞかぬるよはのかいり火」新六「いかにしてつかふうなほのさばきつゝおこのふみちに心みだれし」後撰集、雜三「しそくに侍ける女の男に名立て、かゝることなんある、人にいひさばげといひ侍りければ、貫之「かざすともたちとたちなんうき名をばことなし草のかひやなからん」こは裂分の約りなるべし。

○さはやか 蜻蛉日記上「いみじう悲しく、我こゝちのさはやかにもならねば、つくづくとふして思ひあつむることぞ、あいなきまでおほかるを云々」

つきといはで、佐とのみ云は、田植る農業を凡て佐と云。その苗を佐苗、植る女を佐少女、植始るを佐開、植終るを佐登などいふが如し。さて又其業する月を佐月と云。其頃の雨を佐亂といふなり。亂とは、久しく雨ふるをいふといへり。これにてさひらき、さのぼるの意を見べし。五月蠅の事は、おのれ別に考あり。又五月雨を佐亂とおもへるはひが事也。(道守云「サミダレハ佐水垂ナル可。雨ノ降テ苗ヲ亂ス」ナラバサミダリトコソ可云)

○さびろ こは今俗にダッソビロイといふにて、坐廣の意也。長明無明抄上「あまりさびろ也となんす」

○三郎 玉勝間五「現報靈異記に、文忌寸氏の人に字曰三上田三郎」といへることあり。聖武天皇の御世のこと也。そのころより三郎などいふ名有しにこそ。字は今の世の俗名のごとし「伊勢物語に「子三人をよびてかたりけり。ふたりの子はなさげなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なん、よき御をこそいでこんとあはするに」(猶「たらう」を参照せよ。)

拾玉集三「おもふ事なにぞと問ん人もがないとさはやかにいひあらはさん」同四俳諧「月も日もさはやかにこそてらすめれいとけきたなき人のこゝろを」今物語「やがて御前にて病やみ、目もさはく」とあきたり「讃岐日記「御口よりさはく」と仰られ出すをきくは「源氏権本「髪さはらかなるほどにおちたるなるべし」同東風「めやすきさまにさはらかに」同初子「髪のですすこしほそりて、さはらかにかゝれるもいと物きよげに」同「髪のかゝりのすこしさはらかなるほどにうすらぎにけるも」枕草子「小舎人はちひさくて、髪のはしきは、すそさはらかに」保憲集詞「池のほとり花のあひだ、とこゝろのほどさはらかに」いづれも爽快のこゝろにて、今もよくいふ詞也。

○さはやく 知顯抄云「二條より上をば清淨にさはやきて、ちりをだにうかへす」

○さひ魚名 頼政家集に「月清みこよひぞみゆる水底の玉もにすだくさひの敷さへ」

○さびらき さのぼる 古事記傳七「二十狹蠅の注に「書紀の字の如く、五月比の蠅也。然るをさ

○さふらひける 「さふらへども」を見よ。

○さふらへば 「さふらへども」を見よ。

○候へども 候へば 候ひける 家隆卿の

詞に「歌はふしぎの物にて候也。きとうちみるに、おもしろくあしからずおぼえ候へども、次の日又々見候へば、ゆゝしく見さめのし候。これをよしと思ひけるこそふしぎに候へなどおほゆる物にて候云々」

○さぶるゝ もの、衰微する事をさぶれたとい

ふは、萬葉一「さゝなみの國つみ神の浦佐備而あれたる京みればかなしも」これとおなじく、さぶれ荒たるこゝろ也。猶この言進方にもいへるよしは、別にしるしつ。すさまじの條に出しつ。合せ見るべし。

○棹歌 夫木抄卅三、喜多院入道二品のみこ「あ

はちふね霧かくれこぐ棹歌の聲ばかりこそせとわたりけれ」

○さほす 曾禰好忠集七月、田子の浦にきつゝな

れけんをとめ子が天の羽衣さはすらんやぞ」同三月中「山ひめの染てはさほす衣かと思見るまでにほふ岩つゝじかな」同中の春、二月のはじめ「さゝきつに

すかきさほせり春ごとになりさす民のしわざならし

も」このうたは、夫木抄七、春雜にも、散木集、戀上、雨中

戀「わが袖をひちがさ雨にそはぬれてさほすといは

ん君ぞをこなる」堀川家集「山がつの道にさほせる

あせ垣にいとほしげなる玉やなぎかな」夫木抄十四

秋般富門院大輔「たまがはやをちの砧にならす也こ

やさほしける手つくりのぬの」これ衣類などをひろ

げて風にあつるをさほすといふこれ也。

○作法 後漢書七十五「東夷傳論曰。老子曰。法

令滋章。盜賊多。有若箕子之省簡交條。而用信義。

其得聖賢作法之原矣」

○様 一時隨筆三「人を崇敬する事。詞に様とい

ふ事、いつの比よりいひつけたるともしらす。頼朝

公の時代までは、たれ殿とばかり書しなり。其後代

をへて信玄の比より、専ら用ふと見えぬ。この様は

上様、下様といふ事、歌書どもに見えぬ。それより

上下ともにいふ事となりぬとぞ見えし。猶來由は

おぼえず」夢庵叢話一册「古老傳云京都將軍武威に

侈りて、太上天皇の尊稱を授からんとせられし時、

仙洞をば公方と申せば、仙洞さまの心を以て、公方

様と稱せとありければ、其時の人は室町殿をば公方

様殿と申せし也。下の殿は其世高貴の人の崇敬に添

習へるに随つ也。されば此様の字は、様式などの様

にはあらで、ありさま、しざま又様かたちなどいふ

様子の意にて、似寄のものゝよし也。其よりして尊

稱の字となりて、あまねく用ひならへる也」正字通

云「俗以可象者爲様子。蓋借様樹名也」本朝俚諺卷

九曰「様此字を用ること、鹿苑院義満公の時よりと

傳ふれども、古記には見えす藤原雅世富士紀行云

「永享四年公方様義教富士御覽のため」と有。鎌倉年

中行事云「藤澤炎上るとき公方様成氏洲崎まで御出

とあり云々」源氏論義跋に「おもひもかけず、御所

様にとゞまりて云々」この書は具顯作にまた太平記主上

御説置其方様カトオボエタル男女、チマタニ立ナラビ

テ」同七先帝船上「上様ニハイマダシロシメサレ候ハ

ズヤ」同十八金崎「上様ノ事ハ」義顯ノノニ一宮同卅五

北野通「ナド關東様へハ御ナゲキサブラハズヤラン」

夜物語「つぶやけるが、御所様にもれきこえにけ

り」同十七「御所様にも其程はあやしき事なかりけ

り」中務内侍日記後宇多院「中將ひさしくたいりさま

へも參らす」今昔十六十六女、倉代ヲ開テ父サマニ

語テ云」同廿九「曳張テ上様へ將行テハ省ニ將入」

此ウへ様ト訓テ、同廿六十八「谷様」増鏡新編もリ「ひがし

公儀トイフ意ガ、同廿六十八「谷様」増鏡新編もリ「ひがし

さまにもそのこゝろづかひすべかめり」同廿九「西

園寺さまにぞ一かたならずおぼしむすはれ、すさ

まじう聞給ひける」玉葉雜一「つぎのとしの秋さま

より云々」これらをおもへばなかくに古さいひな

らはし也。

○さまざまげ 源氏若菜「たちならびさまざまげさこ

ゆ」

○さみしい 人を賤めて「あゝさみしい心ぢや」

などいふ、さみしい也。こは寂寞より出たる言には

あらず。狹隘の意也。文選、封禪文司馬長卿「協氣橫

流武節森遊適、隘五臣本遊原遐濶游泳。注濶狹近也。遐

濶遠也」

○さみする さげすむ 文選二西京賦張平

于「慘則鈔於歎。勞則編於惠能違之者寡矣」註李

善云「廣雅曰。編狹也」李周翰曰「編小也」同上「爾

乃覽秦制。跨周法。狹百堵之側陋。增九筵之迫脅」

方より出て、又我を是とし、人を非とするかたにもうつしいへるにや。さればもと他を零落かす意の言なりけんか、轉じて字訓に用ひたるならし。又人をさげすむといふも、此言を詠たるにやあらん。また下すむと見てもこはよく聞ゆ。可考。

○さめく ぞめく 人のすゝみそよめくをぞめくといふは常なれど、國によりてはさめくともいへる所あり。むかしもさめくとも、ひさめくともいへる事みゆ。沙石集四下「中比小原に上人ありけり云々。都の名僧どもあまた請じて、七日の別時念佛をばじむ。さるほどに京中の道俗男女聞およぶにしたがひて、結縁せんとてこゝらあつまり、ひさめきて拜んといへば、出て拜まれけり」

○さめく となく 雨がふる 更級日記に「さめくとなき給ふを云々」今もいふことなり。雨を春雨、秋雨などとさめといふは、眞雨の意なるを、中のおを省るなり。されば眞雨くなくとは、涙を雨に比べていふにて、歌に袖の雨などよむと同じ意也。俗に泣を見て雨がふるなどもいへる、同じ心也。これに就ておもふに、泣澤め神と申すも、泣眞雨の

義歟。於御涙なりませるとあるににつかはしければ也。 ○さめはた 詩大雅廿七、黃耆台膏。注台始也。 ○さや豆のさや 空穂藤原君「つけまめをひとさやあてにいたすとも」

○さやう 伊勢物語十五段「むかしみちのくにて、なでうことなき人のめにかよひけるに、あやしうさやうにてあるべき女とも見えざりければ云々」 ○さや口箱口 新撰六帖五信實朝臣「かつはまたさす箱口にあふひ鏝こゝろ有けるかなつくりかな」 ○さよみ 東鑑「工藤庄司景光著佐與美水干」とみゆ。今の世に布に細目といふがあるはこのさよみの詠れるなるべし。

○さら 空穂後隆「さえのかしこきこと、さらたとふべきかたなし」同前「さらこにおぼすべき人になん見えぬ」源氏浮舟「さらかへりてねんごるなる」後撰、戀三、題しらす、贈太政大臣「あぢきなくなどか松山波こさん事をばさらにおもひはなる」更の意ならで、俗言にいふさらに近きやう也。

○さらに 後撰集、春下、三條右大臣「きのふ見し花のかほとてけさ見ればねてこそ更にいろまさりけれ」貫之集「菊の花下ゆく水にかげ見ればさらに浪なく老せざりけり」

○さらば 人に別るゝ時にさらばといふも、古き言也。後撰集別の部に、伊勢「さらばよと別れしときにいませば我も涙におぼられなまし」さらばは然あらばの約れるにて、別れを告る詞どもを受けて然あらばといひてわかるゝよしの詞也。

○さらばひ 源氏明石「おこなひさらばひ」同、末摘花廿五「いとほしげにさらばひて云々」散木集「山かげにやせさらばへる犬櫻おひはなたれて引人もなし」濱松三「なげのおい人も見えす。ものきよげにさらばひていやしからず」このサラはされたる意にて、ほひは辭なるべし。

○ざる あじか 竹器に、東國にてざる、大坂の邊にてあじかといふ有。新撰字鏡に「箆志太彌又阿自加又伊佐留。箆盛、穀竹器也。伊佐留」などあるこれ也。(猶「あじか」を参照せよ。) ○猿樂散樂 能、さるがくは猿女君の神樂の

俳優より出で、其戯れわざの餘興をいふ名となれる也。今いはゆる能の事と覺えたるはひが事也。歌舞名物同異鈔上云「抑能と云は、此歌舞授受心法の名目なれば、樂工の家のみにして稱呼するの號也。さるがくは御神樂にさるがく有、伶樂にさるがく有、雜戲にさるがくあり。何ぞ能のみさるがくを用ひんや。先御神樂の猿樂は、十訓抄中第六十五條に「堀川院御時おとゞひにて家綱、行綱と云倍従ありけり。無双の猿樂どもなり。内侍所の御神樂の夜、こよひめづらしからん事つかうまつるべし下略云云」とてその猿樂の態せし狀を出せり。又宇治拾遺物語第五にも此御神樂の猿樂あり。江次第十一云「内侍所御神樂事云々。有奉仕散樂之者と三代實錄五「貞觀三年六月廿八日。左右互奏音樂散樂透撞云云」同三十八「元慶四年七月廿九日。奏音樂散樂雜伎各盡其能云々。善散樂令人大咲。所謂鳴濤人近之」これらの散樂の訓さるがくなりとて、次に伶樂のさるがく能のさるがくを出せり。今案に、江次第十一また八卷に「散樂猿樂也」と見え。明衡往來稻荷祭に「有散樂猿樂之態」とあれば、さる事なるべ

し。又俳優の字より出たるにやともおもふ事あり。其事は過雲抄に云り。散樂の字は周禮、春官大司樂施人掌教舞散樂舞夷樂とあるこれ也。こをさるがくの唱へにあてたるは、播磨駿河の音轉の如し、かの明衡往來稻荷祭文に「又有散樂之態。假成夫婦之態。學衰翁爲夫。摸姪女爲婦。始發艷言。後及交接。都人士女之見者莫不解頰斷腸。怪々之甚也云々」こは後世の態にはあれども、古へにも及ぼしてさるがくの凡をうかふべき也。世に此猿樂を能の名として、神樂のかたはらなりければ、神字を分て申樂と名づくと云類は、皆後の暗推也。

○猿も木よりおつる 本朝俚諺曰「説苑云。吞舟之魚。蕩而失水。則制於蟻蟻者離其居也。猿猴失木禽於狐貉者非其處也」
 ○さる者は日々とうとし 文選廿九古詩云「去者日已疎。來者日已親。出郭門直視。但見丘與墳。古墓犁爲田。松柏摧爲薪云々」
 ○猿をくゝるが如し 涅槃經云「諸獵師純以麕膠置案上用捕獼猴。獼猴癡故往手觸之。觸已

粘手。欲脱手故以脚踢之。脚復隨著。欲脱脚故以口嚙之。口復粘著。如是五處悉無得脱。於是獵師以杖貫之。負還歸家」
 ○されありく 夫木抄卅五、寂蓮法師「あはれなきおほよそ鳥の心すら月よとなればされありく也」

○されごと歌 俊賴口傳上云「俳諧歌といへるものあり。これはよくしれる人なし。又髓腦に見えたる事なし。古人に尋たればされごと歌といふ也。よくものいふ人のされたはふるゝが如し云々」
 ○さればよ 拾遺集「かたぎしの松のうきねとのびしはさればよ終にあらはれにけり」賴政集「さればよなわが身のうさに兼てよりおもひしことぞ人のつらさは」

○さわぎ 空穂後藤「おやたちのなくなりけるさわぎにとりかへしてしかば」
 ○さわぐとやかましい 古事記上卷に「口太乃尾翼鱸佐和々々邇控依騰而」下卷、高津宮大御歌にも「噪々になり、萬葉四十五、珠衣乃狹藍左謂沈」十四「安利伎奴乃佐惠佐惠之豆美云々」これらも

通音にて同じ。共に喧く噪しくさやめくをいふ也。
 ○さをしかの耳ふりたて 實方朝臣集「さをしかのみふりたて、きこしめせおもとを、かすつみはあらじな」

○三衣匣 和名抄「僧坊具」榮花音樂「二三人ぐして三えは、さう座などいふものどももたり」智證大師傳に「開匣取三衣者」
 ○三絃 正字通飲字註曰「樂律有三聲飲。以聲相轉而合也。梁武帝自制四器。名曰通。每通施三絃。因以通聲隨聲酌其清濁高下也」
 ○三間水 三つまの水とも云 行囊抄南遊一、宇治橋下ニ云「世三三間水ト稱スルハ、此橋ノ西ノ方ヨリ第三ノ橋柱ノ間ニテ汲ヲ云。其流水至テ清シ。點茶ノ人必汲云々」みつまの水ともいへるこれ也。

○三々 本朝俚諺曰「三々。佛印語錄云「無著童子問文珠。此間住持如何。文珠曰。凡聖同居龍蛇混雜。無着曰。衆有幾何。文珠云。前三々後三々。無着無對。註九々八」もの、いりみたりたるを三々といふ。俗語これにもとづけり。俗に散々とも書き、庭訓往來云「資具又散々式候也」前三々後三

々の事、五車韻瑞詩學大成にも見えたり」以上本朝
 ○三十六町一里 玉勝間十二「卅六町を一里とするは、或説に織田大臣の世よりの事といふはたがへり。堯孝僧都の富士の道記に、近江のむさの宿を都より十三里などいひ、美濃の垂井をむさより十四里などいへる、すべて今の世の定めとおなじ」太平記十三進の條「今朝の卯刻に出雲の富田を立て、酉の刻のはじめに京著す。其道すでに七十六里とあり」拾芥抄、田籍部云「卅六町爲一里。卅六里爲一條」印本ニハ上ノ里ノ字磨滅シ、下ノ卅ナ此ニ作ル。古本ニヨリテコ、ニ出ス。

○三社の託宣 天神名號 中御門權大納言宣胤卿記云「文龜二年二月十日。侍從二位兼俱所望之三社託宣。并天神名號云々。以上今日書之遺之」また同「十七日。三社託宣一幅。兼永朝臣所望書之」
 ○三千世界 本朝俚諺六曰「數術記遺云。四天下共日月爲一世界。有二千世界。有二鐵圍山。遶之。名曰小千世界。有二千世界。有二鐵圍山。遶之。名曰大千世界。此三千世界之中有二百億須彌山」長阿含經曰「積一千國土名小千世界。積二千箇小千界名中千世界。積二千中世界名三千世

界カキ ○三方カキ 今の三方といふものは、衝重也。八寸臺は足付也。宣胤記「永正十四年十月五日取公卿衝重殿上人前足付」とあり。

○三方乃棄物 本朝俚諺云「仁宗皇帝勸學文曰

「朕觀無學人無物堪比倫。若比於草木。草有靈芝。木有椿。若比於禽獸。禽有鸞鳳。獸有麟。若比於糞土。糞滋五穀。土養民。世間無限物無比無學人」。古文統宗云「凡人の子弟たらんものは諸藝をならはせんより、先書をよみ理をさとすべし。しからざれば平生の言行義理にたがふ事おほくしておぼえず忠孝にそむくにいたれり。書をよみて後小藝をばよう／＼ならふべし。書は本也。他藝は末なり。書をだによめば小藝はくはしからぬとも事たれり。蒲宗孟といふ人は子孫をいましていはく、寒して衣なかるべし。飢て食なかるべし。書をよむことは一日も失ふへからずとなり」以上俚諺

○三昧サミ うた三昧、佛三昧など平語にもいへり。楊升庵外集十三「昧出釋氏書。乃梵語也。此云調正直。又云正定。亦云正受。疏云不受諸受名為正受。

相通ふなるは、おのづからの事也。あながちにひが事どもいひがたし。そはまづ國を指て大八嶋など嶋といふは常の事也。又その嶋々を指て、洲ともいへり。即浦洲、濱洲、中洲などいふ洲と同意也。「諸國の郡郷の名に高須、清須、大須、白須などい／＼あまた見えぬるも此故也。されば書紀には國を云。島にも多く洲字を用ひ、又稀には州字をも用ひられたる也。後に山州、和州などいふも、おのづからそれらの古語のある故也。且は漢様にも通ふ故に、漢文めきたる書には其國々の國司などを、長門の國司を長州刺史などいふことにはなれる也。それも彼阿曾美といふ戸に朝臣の字を填めたる類にて、妨あるにもあらざりし也。されば和州は即ヤマトヤといふ意、勢州はイセシヤといふ意也。他も是に准へて知べし。既にやまとしま、いせしまなどは古歌にもよみて、書紀に洲字を書よりよめるなるべし。あながちに嫌ふ事にもあらざるを、宣長などもおもひひがめて、曲事のやうに禁しめおかれたるは、潜士カキ煮尊の名義を解れたるにも似合ぬ事也。」

○しうとめ しょうとめ しょうとめ

又遠法師云。夫稱三昧者何。專思寂想之謂也。思專則志一分。想寂則氣虛神朗。氣虛則智恬。其照神朗則無幽不徹」

○さんまた 「あざへ」を見よ。

しノ部

○しあやまち 榮化物語月書「いとみじくあさましきことをもしあやまちつべかめるかな」

○思案 「あんず」を見よ。

○州シウ 伊藤長胤が制度通云「後世山城を山州と書、大和を和州と呼が如きは、その語とのはず。或人云、西土にて冀州、兗州などよぶものは、其語に缺る所なし。皇國の内紀州、肥州前後、豊州二、越州三此八ヶ國の外、某州／＼と呼ものは皆語をなさる也。孝德帝以來の非言也。本居玉勝問云云云。案に、古くは此間國を指て州といへる事もあるは、豊秋津洲などの類にて、漢國に冀州などいへると言の

和名抄「舅。爾雅云。夫之父曰舅。和名之字止」また「姑。爾雅云。夫之母曰姑。和名之字止女」また「兄公。爾雅云。夫之兄爲兄公。和名古之字止」また「女公。爾雅云。夫之姉爲女公。和名之字止女」とありて、夫之弟妹も同じ。

○しうとめ 「しうと」を見よ。

○じうりたび 「たび」を見よ。

○じうりくべい 「ぬけ」を見よ。

○しおち 「おち」を見よ。

○しかとせぬ 萬葉五三十一「志可登阿良農比宜可技撫而」案に、こははか／＼しくもあらぬ、わづかなる鬘を搔撫て我がはがほする、今の世にもしかいへる古語の遺れる也。

○しかふ 散木集秋の野になでつ／＼おほすかるかやをしかふく君がみまきさにしつ」又國房「日くるれば野がひの駒もかへるめりはつをに草をしかひかけつ」順注に「しかふとは、草をかりてたばねて、又末を結びあはするをいふ也」

○しかみ登 しかみ火鉢 しくみつら

「顔をしかむとも」「しかめる」ともいふは、縮の

二百四十七

約れる也。古事記下、穴穗宮段に「針間志自牟之家」書紀に「縮見屯倉」顯宗紀に「縮見石室」和名抄に、播磨國美養郡志深之郷あり。されば今縮をチ、ミ、チ、ンなどいふは訛也。加牟は瘦をやさかむといふ類の活き辭にて、顔の短く縮まりたるをいふ也。しかみ火鉢といふも、獅子の顔のしかみたるが附るよりいふなるべし。蜆といふも、貝に段々の筋のつけるか縮みたる貌なるより名となれる也。またしやくみつらとは古事記傳石拆神の釋云「式の祝詞に「磐根木根履佐久彌豆」萬葉二十九丁に「石根左久見手」また六に「五百重山伊去割見」また廿「奈美乃間乎伊由伎佐具久美」などあるを、或説に人の面のたくはくあるをしやくみつらといふに同じくて、岩の凸凹ある上を通行をいふなり。馬ざくりと云も、能の面にさくみと云あるも同じ詞なり」といへり。此意なるべし」

○しかみ火鉢 「しかみ」を見よ。

○しからるゝ 「しかる」を見よ。

○しかる叱 「しかる」を見よ。 萬葉五

三十一人皆可吾耳也之可流」とあれば、古言也。常に

は噴るとも、こられとも、ころばへともいへり。同十四二十一二十五等にも出たり。神代紀に「稜威噴讓」とあるも、もとは同語也。しのびね上」との、しかり給はんとて、おとなしくのたまへば」今物語「しかりはらだちて」盛衰記十七「ユ、シクシカリ音ニテ」讚岐日記「よそにては、しからせ給へといへば」

○しぎ 時宜 時機 回國雜記「老屈のしぎにて合期しかたぐ侍れども」東鑑、六に、式とも、時宜とも書、同七に、時儀とも書り。往生要集には時機とも書り。

○色衣 富家語抄に「法中色衣といふは、香色も其中にこもる事なり。色衣といへばこき紫、こき紅の此二品の禁色を除ては、何にても皆色衣といふなり」

○色紙 寶物集三「二條の堤に色紙灑ありけり。そのあたりの所の者、冷泉河原のしふ寺の地藏講を結び執行ひけるに、紙灑はさして志もなかりけれども、慰がてら物なとも得て食はんとおもひて、講衆に入りぬ」今昔物語「但馬前司國舉といふ人云々。色紙の法花經一部を書寫て」(今案に、かくては色

紙といふ物、いろの名にはあらざるか。空穂物語にも白きしきしなどいへり。さらばしきは重浪などの重にて、厚くかさねて灑を云か。又空穂なるは既に色紙と名になりていふか。色紙の法華經といふは、今の紺紙と聞ゆ。色紙を灑をいへるもいろ／＼の色紙を灑をいへるにや、定めがたし。小大君集「まへにありけるたちふといふうりを黄なる色紙につゝみて、大舍人なりけるおきなにとらせたりければ、くにつかさにつきてそこよりいふ、「山しろのとはにかよひて云々」枕冊子上「宮よりすゝきといへば、みればをり櫃といふものに、うるはしうほりたてゝ青き色紙むすびつたり。みればかくぞ云々」殿上根合永祿六年五月五日「象眼をもて紙としたる色紙形を摸して、おの／＼和歌五首をかく」飾抄「取柄上下巻組 赤或粟樺宿老之人用白檀紙并色紙、壯年之人用紅梅檀紙」枕草子七六「あるなどやうなる物をしろきしきしにつゝみて」同七十五「くるみ立といふしきしのあつこえたるを」同十八「白きしきし」續世繼花のあるじ「しきしがた寺々の額などかき給へり」同の御子「みだうのしきしがたなどかき給ふ」うつば祭使「うたひとつつくら

しめんといふ中略いとやすき事なりとてよみて奉り、ほどよきしきしにかき給ふ」(案に、色紙には名をかゝぬものとみゆ。小右記「長徳五年十月廿八日。右大弁行成書「屏風色紙形。花山法皇主人相府右大將右衛門督宰相中將源宰相和歌書」色紙形。皆書名。後代已失三面目。但法皇御製不知讀人。左府歌書左大臣。件事奇怪事也」落くは「ノ上」しろきしき紙に云々」

○しきらるゝ 夫木抄、廿二、雜、源仲正「鳴かはす鶯のねにしきられてゆきもやられぬせきの原かな」

○しくはす「ぐはひ」を見よ。

○しくみつら「しかみ」を見よ。

○しけ 神武紀十四「天陰而雨氷」

○しけぎぬ 今も世にしけ絹、しけともいふがあり。こは桂糸もて織る故の名なるべし。和名抄「桂糸。説文云。桂口。惡絲也。漢語抄云之介」

○伺候 祇候 今俗に伺公と書はわろし。祇候は同じく通はしならへり。後漢書六十八「侯覽傳督郵張儉因舉奏。覽貪侈奢縱云々。諸罪疊誅之。而覽

伺候遮截。章竟不上」五色石七「一面即治酒。在彼伺候」呂覽六季夏紀制樂「臣請伏於陛下。以伺候之。焚惑不徒。臣請死」白氏文集廿七「祗候」高情「無別物」蒼苔石笋白花花蓮」

○しごく 藤原爲忠朝臣集「とひかふにさはるやつらき尾長鳥しごきておる、松のうは枝」これ今のしごきといふ帯の名は、この心より出たるか。

○し、笛 夫木抄、十二、秋「障子の繪にまぶしといふことをして、し、笛ふくところ「まぶしらすさつをのふえの聲ぞとて知てや鹿のなきかはす覽」

○獅子舞 榮花音楽、樂所亂聲えもいはずおもしろきに、し、の子ども引つれて、まひいで、まぢむかへ奉るにと」増鏡けの日かけ「法言のありさまも、本社にかはらず鎌倉若宮舞樂、田樂、獅子がしら、やぶさめなど、所につけたることおもしろし」

○し、まる 新撰字鏡に「蟠曲也。委也。屈也。志自万留。和太万留」
○し、らみ 「し、らみ」を見よ。

○し、らみ 「し、らみ」を見よ。
○し、らみ し、らみ し、らみ し、らみのしめ
ち、いむ ち、いめ寫 縮 絹縮 案に蜆は

和名抄云「文字集略云。蜆貝音頭字和名之々美加比。似、蛤而小黑者也」とあり。此名は貝表縮まれるが如くして、横理の疊る故に云なるべし。播磨國志深を書紀に縮と書、縮見屯倉首などいへり。和名抄に「同國美囊郡志深之々、郷」ある此地なり。又、縮をし、らとも、し、らぎともいへる、是も縮む意は同じこと也。同抄に「緘子六反此問云之々良岐。緘文貌也」とあり。今、緘緘斗目などいふも是也。さて此等に依て思へば世にちりめんと云きぬも、縮緬なるべし。又縮緬、越後緬などいふも、縮の訛なるべし。其外にも物の緘緘かまれるをち、いむといひ、縮寫などいふも、書緘縮の誤なるべし。

○し、らむ 「つ、まる」を見よ。
○し、らぎ 「し、ら」を見よ。
○し、ららのしめ 「し、ら」及「ち、らみ」を見よ。

○自身 後漢書廿三竇憲傳「憲以單于。不自身到。奏還其侍弟」

○四姓 玉勝間二云「よに源平藤橘とならべて四姓といふ。源平、藤原は中昔より殊に廣き姓なればさもいひつべきを、橘はしも、かの三氏にくらぶればこよなくせばきを、此かぞへの中に入ぬるはいかなるよしにかあらん。おもふに嵯峨天皇の御代に、皇后の御ゆかりに尊みそめたりしならひにやあらん。かくて此四姓のことはもうこしぶみにさへいへる。そはむかしこ、の人の物せしが語りつらんを聞てしるしたなるを、かしこまでしられたる事と、よにいみじきわざにぞおもふめる云々。なにのめづらしくいみじきことかはあらん云々」今案に、氏は言の意は、産統ウツナの省れりたるなるべし。今の俗にては源平藤橘の類を姓とおぼえ、在原、清原などの類を氏と心得めれど、それは漢國の制になれたる心くせにて、此間には乖けたる事也。こゝにては源平藤橘の類も猶昔氏にて、其氏の下につけて、源朝臣、橘宿禰などいふ。この朝臣、宿禰、臣、連、忌寸の類を加

斐泥といふを、此加斐泥に姓字を當來りたれど、これも義理たがひたる事にて、氏の外に別に姓といふものはなし。さて氏は其類族を分たんために號られ

たるなれば「古くは其人の奉仕れる職を、直に氏にせられし事多し。其は道守、壬生、膳、衣縫、倭文などの類也。又その居住る地名より負へるも少ならず。其は息長、甘南備、英多、大宅、桑田などの類也。これらは其地を領せるに依ても負ひ、また其地の本居なるに因ても負ひ、また其氏の人の居地なるに依て、其地の名となれるもある也。猶加の部かばねの條にもいづ。見合すべし。

○しそく紙燭 竹取「まづしそくしてこ、のかひがほ見むと、御くしもたけて御手をひろげ給へるに」落久保一之上「御文を紙燭さして見れば云々」
○したうす 「したじき」を見よ。

○舌うち 宇治拾遺「二十、芋粥すゝりて、舌うちをして」(猶「いもがゆ」を参照せよ。)
○したかた しのびね上「大將こそしかん、のたまへれ。いとよきことた、今世のかためとなるべきしたかたなれば、何につけてもたのもしき人なるを」源氏若菜下「大將もさる世のおもしとなり給ふべきしたかたなれば」同藤原「いとよくおほやけの御うしろみとなるべかめるしたかたなるを」同梅枝「御み

づからも物のしたかたるやうなどをも御らんせいでつゝ、「このゑやうは繪様か、又榮耀か、さだかならねど、えやうならば上への飾をいふなるべし、同物物のこゝろしり給ふべきしたかたをさこえしらせ給ふ」

○したく 竹取「いしつくりの御子は、こゝろしたくある人にて」

○したくみ仕計 竹取「だいかふべきしたくみをしたりとも」

○下敷 下白 今賤きもの言に、妻を下敷とも下白ともいへる言あり。古事記、穴穂宮段に「天皇爲伊呂弟大長谷王子。而坂本臣等之祖根臣遣大日下王之許。汝命之妹若日下王欲婚大長谷王子云云。纒大日下王曰。大日下王者。不受勅命。已妹乎爲等族之下席。而取横刀之手上而怒歎。傳云「等族といふは、若日下王と大長谷王とは、姨甥に坐て、共に天皇の御子なれば、同品の御族に坐よしなり。下席に爲るとは、大長谷王の妃に爲坐ことを、此如はいへるなり。夫婦は交合時に婦を夫の下に敷故に、下に敷れんといふ意也。下敷は下敷よしなり」

○したくみ仕計 今賤きもの言に、妻を下敷とも下白ともいへる言あり。古事記、穴穂宮段に「天皇爲伊呂弟大長谷王子。而坂本臣等之祖根臣遣大日下王之許。汝命之妹若日下王欲婚大長谷王子云云。纒大日下王曰。大日下王者。不受勅命。已妹乎爲等族之下席。而取横刀之手上而怒歎。傳云「等族といふは、若日下王と大長谷王とは、姨甥に坐て、共に天皇の御子なれば、同品の御族に坐よしなり。下席に爲るとは、大長谷王の妃に爲坐ことを、此如はいへるなり。夫婦は交合時に婦を夫の下に敷故に、下に敷れんといふ意也。下敷は下敷よしなり」

繪色紙歌のこゝろは」

○したをまく 明月記「寛喜二年五月三日。天晴。午時許參殿即見參殿。昨日住吉天王寺之文書已委見畢。仰合其理之處。各無弁申之旨大略卷舌退出畢。重究文書之道理可宣下之由被仰云々」

○仕丁 仕丁は下部の事也。つかはれよぼろとよめり。諸司の下人に、直丁、驅使丁、白丁などいへる同じ。勻會云「唐志男子二十爲丁。一説二十以上爲丁」白虎通「丁者壯也云々」

○しちんば 「ちんばう」を見よ。近世異邦より舶來る磁器にジツキンといふ蓋あり。いろくの模様かはりあり。此もやうに就てにやあらん。俗に十錦と書ならはせり。壘養抄に「剔金」と書て、今の沈金彫などに類せるよしなり。剔の清音の謬りなるべし。

○しつらふ 空穂としかげ「御てづからしつらひおき給ひし所にて入て」源氏梅枝「こかき御しつらひもの、おほひ」大和物語「うちのしつらひ見入れば」爲忠後百首、仲正「はしちかくあさまに闇をし

下席に對へ、さるは正しき言にはあらず。たゞ怒りふにはあらず。嘲りたる戲言のよし也」とあり。今の俚言と大方おなじこゝろばへの詞也。

○したくみ 源氏松風「そのことも今くはしくしたくめんなどいふにも」(案に、こは吟味してしるべみる意にいへり。)しのびね下「御身のしたくめよくして」

○したち下地 安法法師集「ひやうぶきやうの宮にて、あめの下地の花といふこゝろを「そぼつとも花のしたちをやどはせん句ふしづくにこゝろをむべく」

○下泣 片泣 古事記、允恭段のうたに「はさの山の鳩の下泣になく」又「下こひにわがとよいもを下泣にわがなくつまを」書紀には「下泣に我なくつまをかた泣にわがなくつまを」とあり。仁徳紀のうたに「片泣に道ゆく人も云々」今の世にも稀にいふ詞也。

○したみ 「しとみ」を見よ。○したらうち 「めぎしだら」を見よ。○したる下繪 おもひのまゝの日記「御屏風の下

つらひて空ゆく月をはれぬよぞなき」

○しと 散木集雜「うちわたりによふけてあるきけるに、かたちよしといはれる人の、うちとけてしとしけるをきいて、しはぶきをしたりければ、はぢて入にけり。又の日遣はしける「かたち社人にすぐれめ何となくしとすることもをかしかりけり」

續詞花「たすのやしろにまるれりける女房のともなるめのわらへの、御前にてしとをしたりければ、あづかりさいなみの、しるを聞て、女房「千早ふるたすの神のみまへにてしとすることのかくれなきかな」榮花初花「御しとなどにぬれてもうれしげにぞおぼされける」空穂「御ふところはなち奉りたまはず。御しとにそぼおはします」同「ちよ君にしとふさにしかけつ」同「犬のしとにぬれたまひぬ」

○しどけなし 小町集、又夫木、十一、秋、小野小町と出「しどけなきねくれた髪をみせじとやはたか、れけんけさの朝がほ」公忠集、又夫木、十一、秋にも出「ほころびてまねしたもと、みえしかばしどけなしとやわれを結びし」榮花初花「しどけなし

ことしげれば、源氏桐木柱「しどけなしものゝきのしもなくやつして」

○しとね 落久保一ノ上「泪より汗にしとねなり云々」

○しとね 久安百首、俊成卿「庭のおもの苦地の上のからにしきしとねにしける床夏の花」夫木抄廿雜、西行上人「青ね山こけのむしろの上にして雪はしとねの心ちこそすれ」

○蔀 半蔀 小蔀 小半蔀 立蔀 蔀屋 俗云したみ 赤染衛門集三「法輪に籠りたりし曉に、蔀をおしあくる人の、鹿のいとちかくも有けるかなといひしに、「朝ぼらけ蔀をあくと見えつるはかせきのしかく立る也けり」徒然草上五十四段「家の造りやうは云々。こまかなる物を見るに、やり戸は蔀の間よりもあかし」(按に、蔀は外戸の事にて、今云雨戸の類也。今俗に家の外かこひの雨覆に、此名のこりてしたみと云も、雨戸より轉じたる也。又商家などにてつき揚る外戸をいふもたがはず。御所方にては外戸の突あぐるをいひ、神社佛閣にては、外戸の格子にせしをいへり。)後拾遺集十五雜一「月のあ

かり窓の如くせしなるべし。)枕冊子一、衣の色をいへる條「藤山ぶきなどいろくこのもしく、あまた小半蔀のみすよりおしいだしたるほど云々」(案に、是を曙抄等に、小半蔀と注したるは誤也。翠籬の小蔀の事也。是もその端より透見する故に云か。此小蔀は木にてするよし雅亮裝束抄にみゆ。)藤原元真集「八月十五夜藏人所にて月のころをあはれがりて立出でゆくに、れいけい殿のみさうしのこたち花すゝき折てたて蔀よりいでたり」赤染衛門集四「擧周が住方にたて蔀などせさするを見て、こなたにもせさせよといひしついでに「又もまたまだき方をば作るめりあれは荒たるやどにあれとや」(是は物をあらはに見せじとて、假に戸を立て、其上を明るくをいふなるべし。)小窓別記四「袁宏道姑蘇游記、虎丘「每至是日傾城闔戸。連臂而至。衣冠士女下迨蔀屋。莫不靚粧麗服」

はた板 花鳥餘情しとみの條にいつ 沙石集三上「泰時常に申けるは云々。あるときの物語に民の煩ひを思ひて、遂に造作なかりけり。御所へ參たれば、人の家の端板は内の見苦き事かくさん爲なるに、泰時

かゝりける夜、半蔀に女どものたちて侍りけるを、をとこまわらんなどいひいれさせはべりければ、よみ人しらす「たれにても荒たるやど、云ながら月よりほかの人をまつべき」花鳥餘情云「半蔀は下は格子はた板などをうちて、上に蔀をつりて、外へあぐる様にしたるをいふ。車にも半蔀とてあり。上のしとみばかりあくれば半の蔀とは名付たる也」秘注「車にも大臣などの車には、半蔀とて有。このの躰は二階造りの様にちと高き所とみえたり」(今案に、かく上を半戸にして外へ開きもし、又突あげもするは、つい外を打見ん爲なれば、しとみといふ語はもし他見の義なるにやあらん。車などにもさる半蔀を付おくも、外を見んためなるべければ也。)大鏡二「左大臣時平、延喜の世間の作法した、めさせ給ひしかど過差えしづめさせ給はざりしに、此殿制をやぶりたる御裝束の、殊の外にめでたきをして、内に參り給ひて、殿上にさぶらひ給ふを、帝小蔀より御覽じて、御氣色いとあしくならせ給ひて云々」徒然草上二十三段「あやしき所にも有ぬべき小蔀、小板敷、高遣戸などもめでたくこそ聞ゆれ」(是はちひさく、今のあ

が家の端板は内まで見えとほれりとこそ仰せ有つれと、人々の中にて申されければ、次を以て奉公せんとおもへる人々、御所の仰の如く誰もかくこそ存候へ、大方御用心の爲にも築地をつかれ濠はられて候はんは目出度候なん。各一本づゝ築候はんは、十日には過候はじ。やすき事に候。やがて此次にひしひしと御沙汰候べしと口々に申ければ、打うなづきて各の御志はかへすゝ難有覺え候云々。ほりなんど掘候は、そらさわざの時、馬人落入てなかくはかりなき煩ひ出来ぬと覺え候。端板のすきなどはかきも直し候なんと申されければ、人々詞なし」(右の源氏の注には、た板とあれば、それを出せしなり。)藤原元真集「麗景殿の御曹子のこたち花すゝきを折てたてしとみよりさしいだしたり」空穂藤原君「ちひささかや屋あみたれしとみ一間あげて」同廿「しみ給ふやは三間のかや屋かたしはつち、あみたれしとみめぐりはひがき云々。又さ口との、方はしとみのもとまではたけつくれり云々」

○しとみや 月詣集雜上「亥日の社に行幸侍りけるに、しとみやのまへにて」中務日記「くるまでし

とみやにまゐる」(猶「しとみやを参照せよ。)

○しな 行しな かへりしな 萬葉十四「あせといへかさねにあはなくにまひくれて宵なはこなに明ぬ思太久流」同二十「とほしとふこなしらねに阿抱思太毛安波乃敷思太毛なにこそよされ」同二十「おもかたの和須禮牟之太波」同三十「人の子の可奈思家之太波」この之太の太と奈と常に親しく相かよへば、即同語にて時といふ古語也。

○しな品 ひん 人の姿につきて「しながよい」「しながわろい」といふ。神樂、取物、弓の歌に「弓といへばしな、きものを梓弓まゆみつき弓しなこそあるらし」此しなは只種をいふ也。これを轉用して云出たらならん。即字音にて「ひんがよい」「ひんがわるい」とも云に相合せてしらる。

○しなえる 萬葉二三十「夏草乃念之萎而」今昔廿七十四「懷ヨリ白キ玉ノ小柑子ナドノ程ナルヲ取出テ、打上テ玉ニ取ルヲ見ル人、可咲氣ナル玉カナ」

○しなひ 伊勢物語「あやしき藤の花有けり。花のしなひ三尺六寸ばかりななん有ける。それをたい

にてよむ」藤原爲忠朝臣集「夜あけぬれば院まうしろの山の尾上にしなひ三尺におよびぬる藤の、いとにほやかなるが、枯木に咲みだれて見る興あり」

○指南 文選東京賦「良久乃言曰。鄙哉予乎。子習非而途迷也。幸見指南於吾子」注、桓譚上、便宜曰「管仲桓公之指南」古今原始曰「指南車亦做黃帝一作以賜。有木人一手指南向」韓非子曰「先王立指南車以端朝夕」鬼谷子註云「周成王時周公作指南車」山谷詩「天生鼻孔司南」

○しにはづれ 長明無名抄、下「歌をふかくあんで、病になりて、一たびはしにはづれしたり」

○しね糸 字鏡「繼殘織餘也。志禰糸」とあり。これ今の世に機の織あまりの末のいとを、ハタシネといふに同じ。延喜式十五「ハタシネ今うたにいけいとよめるは、けだしこのシケン糸と音の通る故か。新撰六帖に、衣笠「わが戀は賤のしけいとくりかねていかなるふしにおもひたゆらん」金葉集、源顯國朝臣「我戀は賤のしけ糸すぢよわみ絶まは多くくるはすくなし」

○しのぐ しのぐといふ言は、もと入がたく

經がたき方へ、しひて入おし通る意の詞也。萬葉三十三「昔の葉しぬぎふる雪」六十三「真木の葉しのぎふる雪」七十三「いづくゆ君が吾を牽しぬがん」八十四「秋萩しぬぎなく鹿」神代紀、一書「我國凌奪」などあり。今の世の言に暑さ寒さをしのぐといふも、右の意にてよく聞ゆ。千載集序藤原俊成「みそもじあまり一もじをだによみつらねつるものは、出雲やくものそこをしのぎ、しき島の大和みことのさかひに入すぎにたりとのみおもへる成べし」續古今集序藤原基家「菅丞相は、延喜より初めて雲上のえらびにそなはり、天曆よりあらたに都の北野に跡をたれしかば松の蔭を分て行幸かさなり、野への草をしのぎて手向をむすびつ、朝夕に仰ぎ尊奉る云々」俗に御凌被成などいふ。しか用るもひが事にはあらねど、言のもととはたとへば、ものゝ高くなりて、空にとい

くを天をしのぐといひ、津波のおし來て山谷をひたすを、山をしのぐとやうにいひしが轉じたる也。

○支配 通鑑、梁武帝紀「支配注支分也。配隸也。支配猶今人言品配」

○しばぐらへ 新撰六帖、正三位知家「こまは

なつ野へのうなるのしばぐらへながき日くらすこれやなぐさめ」

○柴屋 壬二集中、擔衣「くれかゝる峯の柴屋のゆふ霜にたれしらくもの衣うつらん」夫木抄、卅四釋教西行上人「くらぶ山かこふ柴屋のうちまでも心をさめぬこゝろやはある」

○しはる 宇都保俊隆「とねりさうしきをうちしはらせなどし給ふ」同榮使「くりやめしはりかけてうづ」

○しはる芝居 隆信集下「みやこ人まれにいにはねのしばゐしてかへる名残ぞ大はらの里」喜多院親王家五十首、野宮左大臣「しばゐする山松かげの夕涼み秋おもほゆる日ぐらしの聲」夫木、九、後葉集頼政「花摺の衣ぞ露にぬれにける月まつよひのたびの芝居に」

○しひし 器物に用る具也 拾玉四「それもいさつめにあゐしむ言のはのしひしとりおくだすき姿よ」

○しひつ 試筆 年始の試筆の吉書には「天筆和合樂云々」とかくよし、教長脚口傳筆法才葉に見えられたども、和歌をかく事もあり。二水記「永正

十七年正月一日。書「吉書」和歌一首任筆畢」とあり。

○しびと死人 知願抄「しびと目をひらきにけり」

○しひな 穀の實の無き者をしひなと云は、しひなやの略言也。和名抄云「糶。野王案に、糶比之反和名之比奈世。穀有皮而無米也」とある、此之比奈世は眞實無稻の義なるべし。

○じふ 自負 みづからおもひたのむこゝろ也。淮南子十四詮言訓「好勇則輕敵而簡備。自僨而辭助」注「自負自恃也。辭助。不受傍人之助也。僨音負」

○しぶく 新古今、冬、家經「たかせぶねしぶくばかりにもみちばのながれてくだる大の川かな」夫木抄、四、後鳥羽院「花さそふひら山おろしあしければ櫻にしぶくしかのうらふね」清輔集「霜がれの蘆間にしぶく釣舟やこゝろもゆかぬわが身なるらん」(契沖云「しぶくは重吹也」東野州云「しぶくはさしる也」といへり。又名所にもあり。顯季集消息「すいかの關にもふりすてられず、しぶく山をもす

べらかに越にければ」

○しぶく 藤原清正集「くらま山くらくこゆれど時鳥かたしお聲をそれとしらすや」おちくば物語、一ノ上「御文たまへば、しぶく、にうりて云々」夫木抄二長方「鶯のこゑまたしぶく聞ゆなりすたちのをの、春の明ばの」榮花とりべの「しぶく、にてかへらせ給ひぬれば」源氏少女「うへにてしぶく、におほしめしたるを」

○自分 前漢書五十四蘇武傳「武曰自分已死久矣」

○しべ花のしべ 夫木抄、廿七、源仲正「あし曳の山鳩のみぞすさめけるとりぬる花のしべになる身は」後拾、雜四、祭主輔親「花のしべもみちの下葉かきつめてこのもとよりやちらんとすらん」袖中抄二廿オ引綺語抄云「薄のしべのかざりをぬきて云云」このしべを俗にはすべといふ也。

○しほ 散木、七、戀上「水のうみとおつる涙はなりにつけりあふべきしほもなきときくより」萬代、冬、仁和寺入親二品親王「みを江ゆく夜舟のさをや」といむらん月の出しほに千鳥なくなり」千五百番、

越前「有明の月の出しほの湊舟今かいるらし」空穂葉下松原に汐のみつを「深みどりみちひてそむる浦の松いづれのしほにいろ増らん」同あて宮「人しれずそめわたりつる袖のいろもけふいくしほと見るぞかなしき」こは幾入に往時とよせてよめる也。あて宮の入内をなげきて源中將のよめる也。夫木抄卅六「誰もみなうれしきしほにあひにけり波もおとせぬよもの海かな」續古今、秋上、後鳥羽院「さとの海人のたくもの烟こゝろせよ月の出しほの空はれにけり」千載序「なくそぢのしほに」玉葉、俊頼「七十に過ぬるしほの濱びさし」

○しほあひ 「かりしほを見よ。」

○しほさき鹽先 藤原爲忠朝臣集、みなと川岸うつ波のあらくして鹽先にこる五月雨のころ「おちくば物語、一之下「この汐さきに手なさへそ」

○鹽斷 平戸記「寛元三年四月八日。今日平野祭也。依三神事不念誦。但依例斷鹽」

○しほの目 「ベニ」を見よ。

○しばむ 萬葉十八三十一「宇惠之田毛麻吉之波多氣毛安佐其登爾之保美可禮由苦」古今集序に「し

はめる花のいろなくて、にはひのこれるがごとし」かく古言なるを近世の學者の、物に是を俗語とせるは、いかなる事か。記紀の文にも所々に葵と書たる志煩牟とよまん外はあらじものをや。古事記中、明宮段末に「其兄八年之間干萎病枯」堀川院百首、阿闍梨隆源「初霜にまがきの花はしほみにき葉も枯ねとや朝なくおく」

○しほり 一しほ 紅綾、鹿子綾などいふしほりは、しほりを訛れる也。しほをりの約れるにて八鹽折之酒などいふ鹽折也。書紀には「八醞酒」と書り。私記に「或説。一度醞熟綾取其汁。弃其糟。更用其酒。亦爲汁。亦更醞之。如此八度は爲純醞之酒也。謂之鹽者以其汁。八度綾返故也。今世亦謂二度便爲一鹽。謂之折一以其八度折返故也。是古老之説也」とあり。これにて一しほといふ言の意をも知べし。一しほ、八しほ、千しほなどは、染色の事なれども、その折返し染るさま猶右の酒と同じ心ばへなれば也。今一しほ寒いなどいふは俗言なれども、これもなすらへてはささいいふべきもの也。

○しまき 海上の暴風なり。名義は吹巻にて、ふきまく意なる歟。神武紀に、暴風をアラシマカセと訓たるも、海上の暴風にて、即荒吹巻風の意と聞ゆ。古注どもに風の名也といへるもかなはず。又志摩の國の海邊の風なりといふは殊にわろし。萬代集戀三、權中納言長方「しまきふくひいきのなだの舟わたり心まどふもたれによりてか」源伸正集「しまきする藤江の浦に舟とめて月の出しほを待ぞひさしき」夫木抄、卷四、土御門院小宰相「海かけてひらの山風行かへり花のしまきの浪たかくみゆ」殿上藏人歌合、海上月、爲盛「しまきしてすまの浦浪さわげどもどかにすめるよはの月かげ」此外夫木抄中にいと多くある詞也。(猶「はやて」の條參照)

○嶋臺 梅窓筆記上云「嶋臺はもと洲濱なり。それを後には嶋臺といへり」永享九年十月朔日行幸日記後花園院「嶋御盃の臺」とあり。

○しみく 此はしみくかなしなといふ也。徒然草上段「家居のつきしくしく云々。さし入たる月の光もひときはしみく」と見ゆるぞかし」
○しめ 大納言公任卿の北山抄に、封の

字のかはりに近代は忽引墨といふ事あり。そのほどの引さまはいかさまなりけん。既に南朝のころの書牘に「とありといふ也。賴政集に「玉づさにわが引墨のたがひせば見けりと見てもなぐさみてまし」
○しめる ものさびしき事をいふ事あり。讀岐典侍日記上廿五「三位殿たえ入せ給ひぬといひて引さけてゐていぬ云々。日ごろおびたしく物も聞えずの、しりつるけしきどもしめ」と、火を打けちたるとは是をいふべきにやとおぼえておとせす」
○霜どけ 新撰六帖二、光俊朝臣「日あたりの澤のふかだの霜どけにつたひかねたるあせのほそ道」
○霜のけ 藤原爲忠朝臣集「くれかゝる夕の空の霜のけはかさゝざわたす天の川はし」
○しもや下屋 空穂としかけ「しもやに雜仕してありけるを」

○證據 後漢書七十一繆彤傳「時縣令被章見考。吏皆畏懼自誣而彤獨證據其事。掠考苦毒」
○上戸 下戸 高戸 江家次第に「正月三朝。定御藥後取用高戸者」と見えしは、屠蘇酒

の御餘りを飲役人を定るには、上戸の者を司るといふ事也。白氏文集にも「猶嫌小戸長先醒」といひ、又「戸大嫌甜酒。才高突小詩」と有注に「唐人飲多者爲大戸。少者爲小戸」と云事、唐采酒令茶話にみゆ。小補韻會にも出せり。また此外上戸、中戸下戸といふは、律令の書には、農家の貧富によりて大中小を分てる事有。もとはそれによりて酒飲人をもなすらへいへるなり。又、白氏文集廿四戲贈夢得兼呈思黯律「霜鬢莫欺今老矣。一杯莫笑便陶然。陳郎中處爲高戸。裴使君前作少年」
陳商郎中酒戶清酒 裴治使君年九十餘 願我獨狂多自晒。與君同病最相憐。月終齋滿誰開

素。須擬奇章置一筵」
○障子 布障子 胸形障子 昆明池障子 障子 曆二年五月廿七日云々。予本自不知文字也。嵯峨中院障子色紙形。故子可書由彼入道懇切雖極見事惹染筆送之古來人歌各一首自天智天皇以來及家隆雅經卿云々」これ現代にいふ障子とは別にて、唐紙也。別に紙障子といふがあり。下に出しつ。散木集四「陸源阿闍梨、七條房にまうづべき事ありて、たびくまかりけるに、いたはることありて、あはざりけれ

は 紙さうじにかきつけはべりける「こりはてぬへの初雁あきすぐる宿にもあらで人かへしつる」同よしの山の君といふ僧の房の紙さうじにかきつけたりける下略」今昔物語十二「夫のそばに有ける紙障子にあたりければ、たふれて夫のうへにおほひぬ」帳江入楚者爲家卿と阿佛尼と居られたる所へ、爲氏卿ゆかれしが、椽にてこわつくりて、あかり障子をおけていらんとしける時に、阿佛尼障子のしりをおさへて、「一首あそばしたらんと時、あけんといはれしに、爲氏卿とりあへずあかりしやうじを立入て「いにしへにいぬきがかひし雀の子とひあかりしやうじとおもひし」明月記「文曆二年三月十日。夜月明。而映櫻花開紙障子望閑庭」明月記「天福二年八月廿二日。御葬翌日參云々。後日參拜見端立明障子御墓上置石倉犬禦云々」この明障子を紙障子とおなじものなるべし。

布障子 枕草子入「紫皮していやすかけわたして、布障子はりてすまひたる」異本會我物語夜討の條に「火を打振て見まはせば、奥の間の布障子のきはに、左衛門尉と手越の少將と枕をならべてふした

駒形障子 枕草紙五「こまがたかきたるさうじ」
日中行事「やがて御手水の間にて、御うちきの人め
す、其人古によりて馬形の障子にかけたる蘇芳の褂
を上ひき着てまゐる」古書譜云「賢聖の障子の畫
は、昔は漢の宣帝の時に、畫功臣十一人於麒麟閣と
見えし、これ後世にいたりても功臣の像を圖するは
これによりてするわざ也」

昆明池障子 大鏡五「太政大臣兼通御冠めしよせ
て、裝束などせさせ給ひて内へ參らせ給ひて、陣の
内は君達にかゝりて、瀧口の陣の方より御前へ參ら
せ給ひて、こうめいちのさうじのもとにさし出させ
給へる云々」前漢書六武帝紀「元狩三年發謫吏穿昆
明池」

衝立障子 かな裝束抄「このべうぶたつるところ
に、衝立さうじをたつる事あり。おもてきぬにしき
の縁をしたり」
唐綾障子 明月紀「嘉祿三年四月大五H。自朝天
陰晴。巳時許參向相門不例氣云々 依驚參云々 出逢仰近日流布事
歎。有小溫氣顏已腫心神甚苦又寒氣。高野老僧以木

筆書墨繪詔遣障子。昨日持來由有命障子被張唐
綾。筆勢實以珍重見了參東殿云々」
杉障子 秋夜長物語「更行かねのつくくと月の
西にめぐるまでまぢかねたる所に、からかきのおと
人のあくるおとするに、書院の杉障子よりはるかに
見わたしたれば」

〇しやうじき正直 詩經「正直是與。神之聽之式
穀以女」春秋左氏傳「神者聰明正直而壹者也」
〇しやうとく 宇治拾遺三「これこそしやう
とくよ。此道をたて、世にあらんには、佛だによく
書奉らば、百千の家もおきなん云々」

〇庄園 庄屋 名主 明月記「文曆二年閏
六月廿三日。一昨日禪門内府於御前議定被留抑一事。
立庄園可被寄云々。何國何村哉云々」太平記一
「元曆年中に、鎌倉右大將頼朝卿平家を追討して、
その功有の時、後白河院叡感のあまりに、六十六ヶ
國の惣追捕使に補せらる。是より武家始て諸國に守
護を立、庄園に地頭を置。彼頼朝の長男右衛門督頼
家、次男右大臣實朝、相續てみな征夷將軍の武將に
備る」長祿記上「諸國亂れより以來、國に國司なく

くむ」を參照せよ。
〇しやつらび 「しやつつら」を見よ。
〇しやつつら 古事記、中、神武
段に「墨々志夜胡志夜」また「阿々志夜胡志夜」傳
釋云「志夜は平家物語に「志夜冠を打落せ」又「志
夜頬をむす」とぞ踏ける」宇治拾遺物語に、貫
之が東人に令似てよめる歌とて「あな照や虫の志夜
尻に火の著て小人魂とも見えわたるかな」今昔物語
に「志夜類は猿に似て」又「志夜足打折てん物を」
又「志夜衣のくひ取て引立よ」などある志夜と同一
て、物を賤しめ嘲る辭なり。今の俗言にもシヤツツ
ヲと云事あり。さて右に引る中昔の語ども車者など
の字音の如く呼しと聞ゆるを虫の志夜尻と云句、必
七言なるべければなりには然る言なれば、志と夜とを體によむべし」とい
へり。東國には今ももはら此詞あり。

庄園に地頭なく、僅に下人を殘して、或は郷の長に
命じて庄屋を置、假に名主を立て奔走す。依之豪盜
横行し、百姓離散す云々」本朝文粹、二、延喜二年
三月十三日の官符文に「新立庄家多施苛法」と
あり。三代格にみゆ。
〇上分米 「うはまいとり」を見よ。
〇しやく 〇ひしやくを見よ。
〇借家 康富記「近所之借家」
〇しやくり 哭泣の餘聲をしやくりといひ、又
しやくり上てなくなどいふは、さくりにて、いまも
いへり。(案にくりは多具里など、同じ言にて、新撰
字鏡下に「歎歎涕泣貌。泣餘聲也。悲也。左久利」
とあり。)和名抄「噓噓。唐韻云。歎歎漢語抄云。歎
歎逆氣也。和名佐久利」
〇しやくむ 今俗に人の面の中がくぼなるをし
やくむといひ、飯匙をしやくしといふ。此中くぼな
るをしやくむといふも、古語也。萬葉二「岩根さく
みてなづみこし」とよめり岩根カガクチ
往ナナム也 此さくみてと
いへるに同じシヤの切サミと
ミシ共に通 古は地などのくぼき事に
多くいへり。今は萬に通はしいふなるべし。(猶さ

〇差別 十力經一「刹別」希麟音義三「上案玉
篇音初八反。案經合作差字。故經云。種々欲樂勝解
差別。今云刹別。恐因聲誤寫。請諸高識再詳經意」
〇邪魔 藥師經云「信世聞邪魔外道妖孽之師」
〇赦免 後漢書六十二董卓傳「懼等恐乃先遣使詣

長安。求乞赦免。王允以爲。一歲不可再赦不許之。
○しやれもの 落窪物語、一之上「つかひつけたる童女の洒落たる女ぞかし」同「帯刀とていとされたる者云々」

○しやれる おしやらく 案に、しやれはされにて、あざれのを省きたる詞也。しやらくは洒落の音にて、しやれとはもとより別言なれど、詞の意ちかければともに出しつ。夫木卅五、寂蓮「あはれなきおほをそ鳥のこゝろすら月よとなればさりありくなり」土佐日記「しほ海のほとりにてあざれあり」源氏雜本「そはつきさればみたる云云」藤原仲文集「國茂かしき此使にありきける時に、されたる所のわかき人にこゑしければ、それうけさせ給へといひ入たりければ云々」洒落の字は、文選李善が注にみゆ。麗起居注「安帝詔曰。灑落成勳固秉謙挹」山谷「春陵周茂叔。人品甚高。胸中洒落。如光風霽月」

○自由 白氏文集廿五間行律、衣食草疎不是貧。專掌圖書無過地。遍尋山水自由身。
○受戒 今は文字聲していへど、むかしは「の

かり通りつれど、猶石疊をばよきてぞまかりつる」
○受納 後漢書六十八候覽傳「以佞猾進。倚勢貪放受納。以巨萬計」とあり。
○取舎 文選、東方朔畫贊夏侯孝者「至如身爲漢隸。而跡入魏幕。源流取舎。其亦文若之謂」

○しゆら修羅 表巻 古事要訣云「石引物をしゆらと云は、何事ぞ。帝釋大石を動かす事、修羅にあらずば有べからず。仍て名づく」と云々「かやうの戲事は聲などの違は苦敷からぬにや。建仁寺大道に表巻といふ酒あり。門前一といふこゝろ也」

○序跋 空穂藏開「彼書即日の序にいひて侍るやうにも云々。もんその詞はつかなる女子しるべにあらず」コレハ入唐ノ日記チ、漢文ニテカキテラサ」ルチイヘル也。此頃ノ日記漢文ナルベシ
○しよくにん 職人 今世に職人と云物をば古へは凡て手人と云へり。雄略紀に「漢手人。手末才伎」また「西漢才伎」

○如在 此は式目に「如在禮奠」などいへるは祭如在云々の字をとり用ひたり。此語中昔後の書に多くいへりしより、今の俗言にのこりて、如在なきなどいふやうには轉じたりし也。論語「祭如在祭

んごとく」といへり。蜻蛉日記上「よわくなり給ひし時、おんごとくうけ給ひし日、ある大徳の袈裟を引かけたりしまゝに、やがてけがらひにしかば、物の中よりやがて今ぞ見つけたる」源氏夕顔、おんごとのしるしにのみがへりてなん」紫日記「御いたゞきの御くしおろし奉る。御おんごとくうけさせ給ふほど」

○しゆくくとく 宿徳 ものに功勞ある人を云宿老といふにおなじ。後漢書六十六劉矩傳「矩再爲上公所辟召皆名儒宿徳不與諸郡交通」北史、樊子蓋傳「帝指越代二王曰。今以二孫委公與魏文昇宜選貞良宿徳有方幅者教習之」唐書、鄭餘慶傳「遷尙書左僕射々々比非其人。及餘慶以宿徳進。公論浩然歸里」

○じゆつない 無術 都あたりの詞に、むねのくるしき事をじつないといふは、無術にて、せんすべのなき方より轉れる也。東國にては、此意をせつないといふ。是は切痛の轉にて、しどけないの類也。大鏡ニ「太政大臣忠平眞信公翁どもは今もおぼろげにては返り侍らす。今日もまわり侍らす。今日もまわり侍らんか、腰のいたく侍りつれば術無てま

○神如在 回のすさび云「定家卿云、大かたはいかなる賢者、めでたきものを書も、時にのぞみて書失といふものは不及力事なり。漢家の摺本のかた木ども、いかばかりかはたしかなる人にかゝせて、賢者たゞしたるらめど、御封のかた木など申本にもあらはれたる字誤は、かくれなく侍るなり。ものを書にあやまつ時は、さくら花をほくら花と書、ほととぎすをさととぎすと、かゝざるべきにあらず。あまり思ひよらぬ事は、校する時もそらによむほどにかならず見おとし侍るなり。書人校する人は、あやまたず、後の人、秘事、異説知らむは、かならず是を見付て悦て、こやしろに枝さしおほふ櫻を、ほくら花といひ、里なれて久しくなりぬる時、さくらにすといふぞと、我ひとり人九が説をならひたりとさんとする時、用ぬ人侍らまし云々」この言うべなるかな。近古已來さやうの人おほく見えて、秘事傳授の弊少からずおもはる。

○書院 此方の今日にては家ごとに書院といふ一室あり。異邦にては天子の學校の一名にして、儒

者學士の居る所の名也。唐の明皇の麗正書院といふを置て、文學の士を聚めさせられしといふ事、明皇本紀にみゆ。書院の名こゝに始れり。宋の代に至ては五大書院を建らる。所謂白鹿洞書院、鸞湖書院、嵩陽書院、石鼓書院、嶽麓書院これなり。又今の清朝には尼山書院、洙泗書院といふ有て、宣聖六十七代の孫孔尙任が出山異數記にみゆ。いづれも天子より建らるゝ所にして、私塾、郷學の類ひのことにはあらず。

○じらう 「たらう」を見よ。

○しらが白髪 しらがみ 權中納言兼輔卿集

「櫻花しらがにまじる老人のやどには春のゆきやたえにし」後撰集冬兼輔朝臣「年毎にしらがの敷をます鏡見るにぞ雪の友はしりける」新古今、雜上、堀川左大臣「老にけるしらがも花ももろともにけふのみゆきに雪とみえけり」拾遺集雜卷木伊衡「かざしてはしらがにまがふ梅の花いまはいづれをぬかんとすらん」

○しらが 今の世に麻の晒したるをしらがといふなるは、いと古より云ことゝ見ゆ。萬葉三三七十

「白香村木綿取付而」十二「白香付木綿者花可母」などよめるは、白き麻を木綿に取付て、神に手向しなるべし。今の世に祝ひ事に用るは、この遺風と見ゆ。又新らしき衣の仕付麻をいはひ事とするも、古へによしある事也。卷十九に「白香付わがものすそにはひてまたん」などあり。是を宣長が説に「白紙の古名として、今世に幣そくをつくる事也」といへるは、なかゝにかなひがたし。

○しらがみ 「しらが」を見よ。

○しらす白洲 堀川百首、權中納言國信「友千鳥むれて渚にわたるもおきのしらすにしほやみつらん」

○しらぬがほ 萬代集、戀四、西宮左大臣「ひたみちにしたのめば人のつゝともしらぬがほにてあらんとぞおもふ」

○しらす 案に、しらすは覺る心也。輿のさむるを座のしらけるといふ、鼻しろむのしろむとおなじこゝろなるべし。「山ざとの心の夢にまどひをれば吹しらすかすかせのおとかな」空穂としかげ「てにふれて久しくなりにけるにこゑもしらす」

○しりおよぶ 源氏物語須磨しりおよび給ふまじきをさめみかはやうと

○尻が い 舟の加伊 新撰字鏡に「鞞

鞞也。尻加支」また和名抄車具の條に「鞞四聲字苑云。鞞音秋。字亦作鞞和名之利加岐車鞞所以制牛後也」同抄調度下「鞞唐式曰。諸蕃入朝調度帳幕鞍鞞鞞轡景事供給鞞音秋。和名之利加岐」又字鏡に「鞞也。藥乃加比」とあるをおもへば、萬葉集に權を加伊と假名にてあるは、はやくよりの音便ならんかとおもへり。猶よく可考。

○しりがさ 本妻牛祭々文に「或波鞍仁尻瘡乎

摺剝天悲毛有里」

○しりざし 「せんざし」を見よ。

○尻鞞 尻鞞といふもの勇ありて美々しきもの也。旅行の時の物也。勸修寺の吉部秘訓抄に「天子十里以外の行幸には、かならず内侍所を御供奉あり。其時の供奉の人々も、尻鞞の太刀を帶すとあり。下々の人の遠足に引はたをかくると同じ意也。さて十里以外を旅と云し故に、今も旅合羽の事を十里合羽と

いふ也。夫木抄卅二雜衣笠内大臣「いまはしもさぞしりぬらんしりさやのさしも心におもふけしきを」○しりぞく 退正治二年百首「何とかや風にしりぞく鳥の名になげきて年をわたるとぞさく」

○しりめ後目 狹衣一下上「しりめはづかしげにみいれつ」源氏夕がほ「しりめに見おこせて」同

つゝ女君しりめに見おこせて」

○しる汁 空穂祭使「くりやめくろきこはひけ

にいでてさや汁のしるしてもきたり」玉勝間曰「甘露寺元長卿記於姉小路三位亭有汁。又云内藏頭有招事汁張行」今の世にも田舎にて汁といふ事ありて、客おのゝ飯をばおのが家より持來て、其家には菜と汁をまうけてあるじする也。是を汁講といふ國もありとぞ。

○汁講 甘露寺元長卿記に「於姉小路三位亭

有汁」また「内藏頭有招事汁張行」など見えた。今の世にも田舎にて汁といふ事あり。客おのゝ飯をばおのが家より持來て、其家には菜と汁をまうけて饗する也。國によりて汁講ともいへり。○しれ難 字つばとしかげ「めてしれて云云」續

世継みかきの松「たてまつらさらんはしれことなりといさめければ」方丈記「かくわびしれたるものどもありくかと思れば」土佐日記「ありとあるかみしもわらはまで、をひしれて」今昔、廿八「白事ニハ非ズヤト云テ」同廿三「郎等ノ片白タル有ケル、糸見苦シキ虚口ヲナム常ニ好ミケレ」中本ヨリ片白タリケル男ノ「源氏少女おやのたちかはりしりゆくことは云云」枕草子四段「まことかてとてしれものはしりか、りければ」同廿八段「びしくをかきし君達も、隨身なきはいとしらくし」源氏舞本中將しれもの「夫木、丹雅俊頼朝臣「つくし舟うらみをつみてもどるにはあしやにねてもしらねをぞする」このしらねは俗にいふそらねの意なるべし。

○白むく 萬葉集に「水傳ふいそのうらみのいはつし木丘開道乎またみなんかも」この木丘は借字にて、純開の意なれば、今白むく、銀むくなどいふに同じ。續紀九の詔詞に「佐太加爾牟俱佐加爾無過事」また十五、詔詞に「年實豊爾牟俱佐加爾」などあり。書言字考服食の部に「白無垢」とあれば、この名もや、古くよりの事なり。

○代物 書紀、崇神卷に「倭國之物實。物實此云望能志呂」とある、實にて、何にまれ其物をさしていふ。机代は、机に居る種々の物也。今の世に商人の代物といふも、これによく叶へり。禮物を祝詞に禮代といふも是なり。又社、御船代、御樋代のたぐひ、又苗代などもこれより出たるなるべし。

○しろ綿 會禰好忠集、三月をばり「つばなぬく淺ちが原も老にけりしろわたひける野べと見るまで」

○しわ 和名抄「皺。唐韻云。皺七倫「和名之和。皮細起也」權中納言定頼卿集「九月九日ひねもすに翫菊といふ題を「夕露のおくまで菊をみつるかなおもてのしわをのごひつるより」

○師をとる 源氏紅葉贊「舞の師どもなど、よになべてならぬをとりつゝ、おのゝこもりひてなんならひける」とあり。今の言に師をとる、弟子をとる、寺をとるなどいふも、古き事也。さてとるとは凡て身に受納る意なれば、知行をとる、國をとるなどいふと、つひに同意也。

○しをり葉 六帖「しをりしてゆかまし物を會

津山いるよりまどふ道としりせばしをりといふもの、これに見えたるなどはじめならん。

○しをり 「せつかん」を見よ。

○しんじつ 眞實 空穂後陸下「君をしんじつにはあらねど、うれしくこそあれ」勝鬘經「我聞佛音聲。世所未曾有。所言眞實者。應當修供養」義疏第一云「眞實者。聖體圓備。非謬曰。眞至德凝然無虛曰實」

○しんじやく 眞實 後漢書廿二馬武傳「世祖見之甚悅。引置左右。每勞饗將武輒起斟酌於前」文選、出師表簡書孔明「至於斟酌規益。進盡忠言。則攸之禱允之任也」

○しんのみはしら 「だいきくばしら」を見よ。

○しんびつがく 「おいへやう」を見よ。

○しんみやう 衣服をたちぬふものを、今もしんみやうといふ是也。但正字可考。長明無名抄、下「さるほどなるなま身命のきぬぬすみて小袖にしてきたるやうになん」

すノ部

○栖 鄙にて栗子、柿子、瓜、茄子等を持集る

處をば、栖と云で、其を買出行を「栖に行」といひ、夏成、秋成を賣始るを、栖開といふ。史に「田原御栖、丹波御栖、狛野御栖」などある栖は即此言なるべし。然るに引田栗栖、篠波栗栖、立田栗栖など栗にのみ栖と云て、其他の物には某原、某園、某生と多く云るは、いかなる事にかあらん。もしは古く大かたの菓子、總て栗とはいひしか。後世凡ての木實を毛々といへる言もあればなり。さて其栖は鳥の巢より、卵を取出すと、其心ばへや、似たれば、巢も本同じこと歟 山科小栗栖などあるも、栗實には限らず、諸の菓、野菜の出し地たるが、名となれるよし、雅言の部にへり。

○す すといひて、爲るなる事多し。駿河より三河邊の人の言に、する事をせず、行ことをゆかず、聞ことをきかずといへり。

○すあし 「すで」を見よ。

○粹 今遊里の方言に、粹、不粹といへり。これもより所あること也。文選六臣註「魏國先生有辟其客」注、劉云「孟子曰。君子生色。粹然見面不言而噉」

○すか 東國にて、もと海河などの押入たる砂

地の所をすかといへり。洲陸の意にて、岡のかに同じ。東海道の白須賀、奥の須賀川等の外にも、國々に某須賀といふ地の多き、みなこれなり。

○すぎき 堀川百首、權中納言國信「あづまやの賤のすかきの下寒て山とよむまであられふる也」

○すがく 巢かくる也。後拾遺、秋上、長能「さゝがにの巢がくあさぢの末ごとみだれてぬける白露の玉」後撰集、雜四、いせ「さゝがにの空にすがける糸よりも心ぼそしやたえぬとおもへば」

○すかす 欺をもいひ、又虚誕をいふをもすかすといへる事あり。古今集、誹諧「よそながら我身にいとよるといへばたいいつはりにすぐばかりなり」後拾遺集、誹諧、少將義孝「わすれてもあるべき物を此頃の月夜よいたく人なすかせそ」續詞花、戲吟、小大進「きてかへる物ともしらでなつ衣ひとへこゝろはすかされにけり」拾玉集、法樂日吉百首

「人ならばうらみもすべしいかにせん我をすかすぞ我こゝろなる」大和物語「さて時々かよひけれど、いかなる人のすかすならんと、つゝ、ましかりければ」

○すがた 新撰六帖、二、信實朝臣「あづまの

まゆみのものいろこくてときはすがたもいつもみぢせん」

○すがない 萬葉集、十七四十一「心にはゆるぶことなくすがの山須可奈久能美也こひわたらん」催馬樂、帶垣五段「すがのねのすがなすがなき事を我はきくかな」

○すがめ 新撰字鏡云「膝須加目」

○すがりつく 金葉集、夏、源俊賴朝臣「この里もゆふだちしけりあさぢふに露のすがらぬ草のはもなし」

○すがる 堀川院百首、藤原顯仲朝臣「まきのはにすがるたるひの春風にうちとけてなくうぐひすの聲」拾玉集一、日吉百首、無常「朝づくひさすやをかへの草のはにすがれる露をよそにやはみる」同

四盧橋子低山雨重「香をとめてむかしを忍ぶ袖なれや花橋にすがるあめかな」金槐集下「道とほしこ、はふたへにかいまれり杖にすがりてこゝまでも來る」夫木抄八五月「正三位季經「見わたせばあやめにすがるさみだれの軒の雫やけふのくす玉」

○すぎき 好 古今集二十俳諧「梅の花ちりての

後のみなればやすきものとのみ人のいふらん」後撰集十戀二「女のもとにつかはしける、よみ人不知「おとにのみ聞こしむわの山よりもすきの敷をば我ぞみえにし」これは杉にいひかけたり。

○敷奇 下學集「敷奇辟愛之義也」前漢書四十五李廣傳「大將軍陰受上指以爲李廣敷奇」注「如淳曰。敷爲匈奴所敗爲奇不耦。師古曰。言廣命隻不耦合也」

文選古意詩徐敬業「寄言封侯者敷奇良可歎」注「李善曰。漢書云々下同」戴恩記下「昔はすきといへば歌の事に人の心得侍りたり。歌の事をいひて「忠盛もすいたりければ、かの女房もすいたりけり」と平家にもうたへり。好士といふも歌人の事なり。然るを今茶の湯をおし出して敷奇といふは、歌道の世にすたれたる故也」

○すぎくは 空穂、藤原の君八「殿の人がみ下も、すぎくはをとりはたけをつくる」

○すぎしやうじ 「しやうじ」を見よ。

○すぎな 夫木抄、卅四、神祇、惠慶法師「いなり山みづすぎなかにますか神我ことたてゝたのむかひあれ」

○杉柱 夫木抄、卅、雜、民部卿爲家「ゆきくれてやどかるいほの杉はしらひとよのふしもわすれやはせん」

○透はて、新撰六帖、一、衣笠内大臣「吹風にかれのゝをがやすきはて、秋みしほどの下をれもなし」

○杉原紙名 高檀紙 園太曆曰「康永三年二月廿一日。今日予上三左大臣表狀也。草事云々。尋常

楳原二枚不加三禮紙。如何 本義事。高檀紙可加三禮紙也。但楳原又常事」

○すく 漣 保憲女集「みちのくのまゆみのかみもすきあふまじく」

○すぐ 賴政卿集「ひきわたす大原山のよこがすみすぐにのぼるやけふりなるらん」

○乏少 萬葉集、十一「十五又十二八「すくなくも心の中に」十五三「すくなくも妹に戀つ」十八三「すくなくも年月ふれば云々」これらは下に詞をそへて大方ならずと裏へ反る心によみたれど、多きに對へていへれば、今物の乏少なるを、すくないと云もひが事ならず。

○すくふ 榮花物語、御着裳「うち川の底にしづめるうろくつをのみならねどもすくひつるかな」

○すくむ 新撰六帖、冬月、信實「木がらしのふきすくめたる冬よに月みてさむきわが姿かな」

榮花物語音楽「その見物聞望の人、たちすくみかしらいたうもの、けうおぼえず」蜻蛉日記上「さらせんにせんかたなくわびしきこと、世のつねの人にまさりたり。あまた有中に、これはおくれはおくれじとまとはるゝもしるゝ、いかなるにかあらん足手などすくみにすくみて、たえ入やうには云々」

○すくもすかぬも 曾根好忠集序「なにはなるあしきもよきもおなじごとすくもすかぬもことならず云々」

○すくれてよきものはすくれてわろし 事文類聚云「叔向欲娶申公巫臣氏。其母曰。吾聞甚美必有甚惡。夫有尤物一足以移人。苟非德義。則必有禍。」又見千金方云「見妙美女。慎勿熱視而愛之。當是魘魅之物令人深愛也」

○すけ 今世に雇ひ人をすけといひ、又すけてくれなどいふも古言也。古事記、神代段に「今すけ

に來ね」とよませ給へり。守の助を助輔佐など云も此意也。

○すげ 「しなの、はつりをいとよきほどにすげて、おうなのきぬにぬひつくと見給へし」

○すげない 今もすげない人などよくいへり。蜻蛉日記、下「かへりごとするを、親はらから制すとき、て、まろこすげにさしてうちをほみ君ひとりみよまるこすげまろは人すげなしといふ也」源氏物語桐壺「物思ひしり給ふは、さまたちなどのめでたかりし事、心ばせながらかじめやすく、にくみがたかりし事など、今ぞおほしいづる。さまあしき御もてなし故こそはすげなうそねみ給ひしか」河海抄、日本紀點「無人望」とあれど、こは素氣痛の義にて。その素氣は字音にあらず。適普通へるなり。又痛となしとかよふ事は、守部あらはし、難語考二編に出。

○すげなき 空穂物語只こそ「上中下、すげなきあそびを心ひとつやうて、こと心なし」

○すける かたへの人の物を補ひ助るをすけるといふは古語なり。古事記、中、神武の御製に「たなめて、いなさの山の、木の問よも、いゆきまも

らひ、たかへば、われはやゑぬ、嶋つ鳥、うかひがとも、伊麻須氣爾許泥」とあり。助字を常にたすけと云は、手助にて、本語は須氣なり。故諸司の次官輔副助介を皆須氣といへるも、正官の人をすける也。

○すげる 紀貫之集「松の音をことにしらぶる秋風は瀧のいとをやすげて引らん」古今集、雜上眞せい法師「みやこまでひらきかよへるから琴は浪のをすげて風ぞひくらん」

○すごい これはやくより歌にもよめれば、俗言ともなしがたけれど、今ももはらいふ故なり。源氏物語帯本「いはんかたなきすごきことのは、あはれなるうたをよみおき」赤染衛門集二和泉式部かへし「秋風はすごく吹とも葛の葉のうらみがほには見えじとぞおもふ」新古今集、西行「ふる畑のそばのたつ木にゐる鳩の友よぶこゑのすごきゆふぐれ」拾玉集二白鷺立汀「すごきかなかもの河原のかは風にみのけみだれて驚たてるめり」中務家集、秋部「萩のはのいろづくたにもある物をこゝろすごくも行あらしかな」

○すこし 紀貫之集「故郷にさける物から櫻花色はすこしもあれずぞありける」

○すごく 古事記、明宮段の大御歌に「志那陀由布。佐々那美遲衰須久須久登。和賀伊麻勢婆夜」傳云「滯らす速に行貌なり」竹取物語に「かぐや姫」此兒やしなふほどにすくくと大きになりまさる」狹衣に「それよりやがて火の光り見ゆる方へすくくとおはすれど云々」

○すさまじ 「すさまじき物しり」「すさまじきちから」などいひ、又省きて「すさまじい人」「すさまじい男」などもいへり。此語もと進みより出て、しは、うれし、かなしなどのしと同じくて、しきしけれと活けり。古事記上卷「爾速須佐之男命云々。自我勝云而於勝佐備云々」傳釋云「師説に進む事を須佐備と云、又そを約て佐とも云。須佐を約て佐なり。今神嘗に勝給る御心の進める勢に荒び給ふを、勝佐備と云て、進み荒ぶる意なり」とあり。須佐之男と申御名も、此意也。故或書に進雄とかけり。後世に物の進み荒きを須佐夫と云ること多し」といへり。今按に、後世の書には此すさまじに冷字

を當て、物冷など書て、其意とすめる、是も古くより然り。萬葉集一、感傷近江舊都歌に「さゝ浪の國つみ神の浦佐備而荒有みやこみれば悲しも」此佐備は即冷の心あり。されど彼進みの轉じてにはあらず。すゝむ方にも、さぶるゝ方にも、自然と牽れゆくをすさふとも、さぶるともいひし也。此事諸説皆わろし。守部難語考に委く辨へり。こゝに擧る俗言のすさまじといふは、さぶるゝ方にはあらず。進む方也。夫木抄、十六、冬、西行上人「冬枯のすさまじびなる山ざとに月のすむこそあはれ也けれ」

○すさまじき 枕冊子「すさまじき物、しはすの月夜」河海抄、十列、冷物「十二月々夜。十二月扇。十二月蓼水。老女假粧。女醉。胡瓜老。法師醉舞。無酒神樂。勅使被打囚競馬。昆崙八仙畫舞」源氏物語初下「影すさまじきあかつき月夜に雪はやうくふりつむ」同下「冬のよの月は、人にたがひてめで給ふ御心なれば」同「あかつきすさまじきためにいひおきけん人のこゝろあさよとて」

○すさめぬ 古今集、雜上「おほあらしの森の下草老ぬればこまもすさめすかる人もなし」

日すゝをはくなり。すゝ竹賣り、荒神の繪馬賣來りおはらひ納出る」

○すゝはき 「すゝはらひ」を見よ。

○すゝはらひ 又すゝはき 明月記「天福元年十二月十九日。天晴。寒氣適休。入夜雨降。令拂塵塵煤云々」東鑑、卅一「嘉禎二年十二月己丑。霧云々。御煤拂事有相論」など見えたり。是より以前の書どもにはいまだみあたらず。中原康富記「寶徳元年十二月廿日。參給事中文亭煤拂也云々」と見え、中御門宣胤卿記にも「文明十二年十二月九日。禁裡御煤拂」と有。

○すゝび 和名抄に「唐韻云。始煤灰集屋也。和名須々」とあり。萬葉集九三下「鷹八線須酒師競」同十一七下「難波人葦火燎屋之酢四手雖有云々」此すゝてあれどは、すゝびてあれどの切れるなり。

○すゝめありき 今云ちよこゝはしりに同じ。隆信集、下四「女のもとより、曉のねざめにすゝめありきするあみだのひじりのこゑもわが身ひとつにしむ心ちして、思ふことなき床には、よもき玉

○すしう もうす 僧の襟巻を云。故事要訣云。泗州と書也漢土に泗州と云國あり。彼國の人民必ず頸巻をする、是國の風儀也。始め此國より爲出す歟。仍是を泗州と云也。先はししうなるべきを、すしうは唐音也。帽子をもうすと云、四百をす百と云が如し。泗州の僧伽和尚始て作るといへり」

○すゝかけ 夫木抄、卅三、鎌倉右大臣「すゝかけの昔おりきぬのふる衣おてもこのものにきつものなれけん」

○すゝぐ 夫木抄、廿四、雜、實方朝臣「中河にすゝぐねせりのねなきごとあらはれてこそあるべかりけれ」

○すゝけ 夫木抄、十七、冬、從二位家隆卿「さびしさのたらぬ柴やの夕けふりあたら敷の玉やすけん」同廿五、雜、信實朝臣「とまりあらばうらのもふねこぎよせよくものすゝけに日はくれにけり」同卅二、雜、光俊朝臣「年をへてよにすゝけたるいやすだれかけさげられて身をば捨てき」

○すゝ竹うり 荒神の繪馬賣 温故名跡志、一云「十二月十三日御煤拂、屋敷方町屋ともに冬當

はざりつらんなどいひたりしかば」今云、寒念佛の類歟。

○すゝめがくれ 會根好忠集、三月をはり「淺ぢふもすゝめがくれに成にけりむべ木のもととはこぐらかりけり」

○すゝめ弓 夫木抄、卅二、雜、西行上人「しのためすゝめ弓はるをのわらはひたいるばしのはしげなる哉」

○硯がめ 水入 榮花物語「石蔭卷に御前のすゝりがめ」

○すゝりのふた 夫木抄、十四、秋「ある所へすゝりのふた返とて、きくをまぎりたれば、少將内侍「ときならぬ花もささける玉くしげふたみの浦の秋の白菊」

○すゝご 夫木抄、十一、秋、衣笠内大臣「花すゝきすごの糸をよりかけて玉をしげぬく秋のしら露」

○巢だつ 後撰集、春上「谷さむみいまだすだゝの鶯のなく聲わかみ人のすさめぬ」

○すぢ 藤原爲忠朝臣集「天の原つらなりわたる初雁は雲すぢかふて横をれにけり」

○すぢりもちり 宇治拾遺、一五「すぢりもちりるひ聲を出して一座をはしりまはりまふ」

○すぢり すあし 天武紀に「何無一人兵徒手入東云云」とある徒手を、あるやごとなき御本の古訓に、ステニシテと訓たり。持統紀に徒跳をスアシと訓たり。

○すぢに 既に全く、盡くの意なり。古事記序に「巳因訓述者云々」繼體卷に「全壞」萬葉十七十三「天下須泥爾於保比底布流雪乃」などある、皆古の意也。又十六「吾名波須泥爾多都山云々」此はもしはやくの意歟。又猶盡くの意にてもあらん歟。中古後は大かたはやくの意にのみいへり。夫木抄、卅六、有家「月見てもわがよはすすぢに久かたのあまねくてらす秋のころを」今の俚言には「すぢに死る所であつた」「すぢに落んとした」などいふ。是もよく見ればやく古き時よりの詞也。建禮門院右京大夫集上九「いづれのとしやらん、五せちのほど、内裏にちかき火の事ありて、すぢにあふなかりしかば、南殿にようよまうけて、大將をはじめ衛府のつかさのけしきども、心々におもしろく見えしに云々」

○捨らるゝ 夫木抄、十九、雜、道因法師「朝ごとにとももの宮つことるちりの捨られにける身をいかにせん」

○すどほる 林葉三「月影のかべのくづれをすどほればとめがほなるきりくすかな」同、隣家

秋のゆふ風「平家物語、八「車にはめされ候時こそうしろよりはめされ候へ。おりさせ給ふ時は、まへよりおりさせ給へけれと云ければ、木曾、いかでか車ならんからに、何條すどほりをばすべきとて、つひにうしろよりぞおりてける」

○すなご 金砂 銀砂 新撰字鏡に「礫礫石微細而隨風飛也。伊佐古又須奈古」と和名抄云「礫類云。砂水中細礫也。所加反。和名以左古又須奈古」

○すなごり いさなどりの伊を省き、佐を須に轉じて云也。雄略紀の歌に「美那曾々久羨美能哀登賣」武烈紀に「瀬灘曾々矩思寐能和俱吾鳴」などある、水潜より出て、潜魚とも伊の發語を置て、伊潜魚とも云故に、約めて潜魚取とも云也。此事は山彦



ばかりにて「長明無名抄」すがたもすなほなる歌にて「堀河百首、仲實「夢にみし人をうつゝにえてしより世もすなほにははや成にけり」

○すのこ 和名抄「功程式板敷簀子。須乃古。床上籍竹名也」

○すは 「すはといはは」「すは打出よ」などいへり。近昔の軍書にも多き詞也。更科日記、泊瀬詣の所に「三日さぶらひて、曉まかでんとて、うちねぶりたるよさり、御堂の方より、すは稻荷よりたまはるしるしの杉よとて、ものを投こすやうにするに」

○す白 此病は、醫家には病源を考ふれば辨知すれども、俗には陰囊のはるゝをいひて、男子のみ病事とおもへども、女も病也。榮花鳥島都野の卷に云「中宮わかき御心なれば、此御事をさまなくにいみじうおぼさる。との、今はくすしに見せさせ給ふべきなり。おそろしき事なりと、たびく聞えさせ給へど、くすしに見すばかりにては、いきてかひあるべきにあらずと心づよくのたまはせて、見せさせたまはず。御ありさまをくすしにかたり聞すれば、すばくにおはしますなりとて、其かたのれうちどもつ

冊子一卷十にも出、又雅言部おすくはしの條いさりあさり等の條にも委くいへれば、こゝには略せり。古事記、上「鳥遊取魚」萬葉集四三「妹が爲吾すなどれる」兼盛集、又大和物語七段「しほがまのうらにはあまやたえにけんなどすなどりとみゆる時なき」草根集六「淺せゆくいさなとるとや夢にさへ汀の鷺のねぶりたるは」又「打ひれて鶴のある川のみなさはにおのさはしるいさな白さき」同集十「種おろす苗代水にゐる鷺のいさなとるをもたつるさとの子」

○すなはち 狹衣、二の下「其有けん扇おこせよ、つたへよと有けんも、いとゆかしくなんとのたまはせられたれば、すなはちもち参りて、是は長き世のかたみとおも給うれば、かへして給はらんと申すを云々」すなはちを異本には、やがてとあり。即の字すなはちともやがてとも訓べし。

○すなほ 新撰字鏡下に「儉素質直之貌。須奈保」古今集序「神代にはうたのもじもさだまらず、すなほにして、このころわきがたかりけらし云々」源氏物語下「たすなほに大やけさまの心はへ

かうまつる云々」舊本今昔物語、第廿五「今ハ昔腹中ニ寸白持タル女有ケリ」ともいへり。

○すはやり 東鑑、十「建久元年十月十三日、頼朝於遠江國菊河。佐々十三郎盛綱相副小刀於蛙楚割數 以子息小童送進御宿云々。彼折敷被染御自筆曰「待えたる人の情もすはやりのわりなくみゆる心ざしかな」(猶「ひそくなく」を見よ。)

○すびつ 今炬達といふ物の火桶をすびつといふは、沙櫃のよしにて、床を切おとして、直に置よしの名なるか。神代紀に「塗土煮尊。沙土煮尊」とありて、沙土の字をすびつに當たれば也。素櫃としてはかなひがたし。枕冊子、九「御前ちかく例のす櫃の火こちたくおこして」大鏡、五「閑院左大將云々。煮物おほきにつくりて、ふせ籠打おきて、けにき給ふ御衣をば、あたゝかにこそきせ奉り給ふ。す櫃にしろがねのひさげ廿計をすゑて、さまざまの薬をおきならべて參り給ふ」

○吸筒 義經記五吉野落の所「辨慶御前にひさまづきて、左の脇の下より黒かりける物の大なるを取出し。雪の上にぞ置たりける。片岡にならんと

思ひてさしよりてみれば、くり形打たる小鼓に、酒を入て持たりけり。ふところよりかはらけ一つとり出し云々」

○吸物 吉田社家鈴鹿家記「應永六年六月十六日。嘉定中略吸物」六島トアリ 中山親綱記「文祿四年極月三日。丑晴。早天醜酬令登山 略其後理僧正江行向了從三門主二献有之。其後飯被出於理スイ物同一献。其後飯有之。其後水本江行着了門主理弟子來儀スイ物有之飯相伴」とあり。

○すべ 俗言に「スベガヨイ」又「スベスベスル」などいへり。袖中、二廿引「綺語抄云「薄のしべのかざりをぬきて云々。しべを俗にはすべと云也」

○相撲 北山抄「正曆四年七月廿二日。於粟田相撲人給食人會 凡并八番勇力。其後最手以下五人。積鼻禪列立庭中。見了歸入」和名抄「漢武故事云。角觥今之相撲也云々」本朝相撲記「有占手。垂髮。總角。最手。助手等之名別。亦有立合相撲長也」字典云「角觥戲名。觥通作抵云々。漢武帝元封三年。作角抵戲」江家次第、卷八「次相撲一番

自注 最手與助手取之若有腋共可決之者。最手獨練退入。大將以瓜注交名勝者上」裏書云「助手又曰腋也。最手腋手皆近衛府各補其人」也。相撲人者皆近衛之類也」清少納言に「御まへにてさうしに歌ひとつかけと、殿上人に仰られけるを、いみじう書にくすまひ申人々有ける云々」此すまひといふ詞を抄物に「イ子彌蹠」とも字注せるは、たゞすむといふ義にとる歟。文義にあらすやあらん。今按に遊仙窟云「不敢推辭定爲醜拙云々」此意なり。推或推辭など注すべきなり。すまひとは物をいなどいふ意なれば、おのづから相撲の訓義に通ず。伊勢物語に「女もいやしければすまふちからなし」といひ、惠慶法師の「ふく風にすまひやすらん神なびの占手の山の峯のみちば」とよめるに同じ。相撲には占手、最手などいふ事あり。又空穂、俊蔭卷に「れいのすまひありきなめり」とあるは、古事記「舊事記本紀等に逗留をすまふと訓せし意なるべし。

○墨ぐま 今の世俳優の役者どもの、南の眼じりに墨のうすくまをほどこし、紅のくまなどさして

使者勇士のふりをなす事は、いにしへの諒の遺風也 酉陽雜俎「晋法。僕始亡諒二兩眼。再亡諒二兩類。三亡横眼下皆長一寸五分」字書に「諒有罪者以墨涅其面。刀破之而後加墨俗作諒」とあり。古くはこゝにも此刑をくはへられたれば、それを悪人、勇士俵者にとりて、剛氣をしめす也。かの道臣命の武勇をしめさんとて、罪はなけれども目を割て、敵をおどし給へりし心ばへ、古今おなじき也。

○須彌山とたけくらべす これ及びなき事にたとふ。涅槃經云「欲以手爪接須彌山」欲以口齒嚼金剛」新六帖、入道左大辨「つめのうゑに山をばのせてありしとも又あふ事はなほかたきかな」伊勢物語、關疑抄ニ云引駟劫の石をありにおふせてはこふともあなたのみがた人のこゝろは

○すみつき 墨つき 源氏 「しろきからの紙四五枚ばかりをまきつゝけて、すみつきなど見所あり」鈴虫「けがれたるかねのすぢよりも、すみつきのうへにかいやくさま」

○墨壺 萬葉集十六三十一「晉耳者御墨壺」

○墨は餓鬼にすらせ筆は鬼にとらせよ 避暑錄

云「磨墨如病兒。把筆如壯夫」
 ○すもり 物の後に取のこさるゝをすもりになるといふは、鳥の子のかひわれずして、外の巢立し跡にのこるを巢守といふに、准へて云也。和名抄、呂氏春秋云。雞卵多般音段。和名須毛里野王按般者卵不解也。空穂物語、藤原の君七「あて宮にすもりになりはじむるかりの御覽せよとて」又十七「はまちどりふみこし浦にすもりごのかへらぬ跡はたづねざらなん」大和物語、上卷「故中務の宮の北方うせ給ひてのち云々所」なまき人のすもりにだにもなるべきに今はとかへるけふのかなしさへし「宮御がすもりにおもふ心はといむれどかひあるべくもなしとこそきけ」忠見集十九「ある御息所のまかで給けるに、しばしとまりてある女の出にけるにすもり子も立にけるかと見るにこそかひなき身さへ恨みありけれ」藤原基俊家集、下「すもりごのいひいでぬこといふせきにかひこめくつる身とやなりなん」拾遺集、物名「鳥のこはまだひな、がらたちていぬかひのみゆるはすもりなりけり」頼政卿集「鳥のこのすもりにとまる身なりせばかへりて物はおもはざらまし」

夫木抄、廿七、雜、源忠季「すもりごのかへらぬ事もありなましあけつげ鳥の聲なかりせば」
 ○すやつばら 源氏物語玉かづら「すやつばらをひとしなみにはし侍りなんや」落くば二上十七「すやつはいづちゆくともゆくともよくありなんや」
 ○すり 河社に「空穂物語に「まだほのくらく、さきの如くすりやありと見侍れば云々」俗に盗人をすりといふ是也。和名抄に、籠をすりとはめり。竹器也。さる物もて来て、物取入ていぬれば、名づけたるにや」とあり。今按に、籠はいにしへ旅行の具なれば、其中に貯へおける物をかすめんとすめるより、其者を終にすりとは云ならんの心也。もしは又今世の金着切などの如く、人にすりよりさはりて、腰のまはり身に近き物を伺ふより云にやあらん。猶考べし。
 ○摺目 夫木抄、卅三、雜、よみ人しらす「年をへて日かげにみれどをみ衣すりめことにもめづらしき哉」
 ○するく 無滞 小嶋口號「するくともあらで日敷のみをつもりける」

○水火のあらそひ 韓退之詩「石鼎妄使水火争」
 ○推察 後漢書廿一「邳彤傳論云「凡言成事者。以功著易顯。謀幾初者。以理隱難昭。斯固厚情比迹。所宜推察者也」
 ○すゐもん 「がうもん」を見よ。
 ○すゐ 俗に御末といふ。はしたも也。狹衣四丁弁のめのとのさまをいへる所に「いとしのぶさまなる御つばねしいで、すゐなどあつかひありて」といふにて、爲居也とおぼし。猶倭例考べし。
 ○陶人 萬葉集十六「三十三に「陶人乃所作瓶乎」
 ○寸陰を惜む 淮南子云「聖人不貴三尺之璧。而重三寸之陰。時難得而易失也」晋書云「陶侃曰。大禹聖人惜寸陰。至子凡人當惜三分陰」
 ○寸法 中務日記「きぬの寸法などたまかにあひしらはせられたれば」

作是誓言」
 ○消息 五色石セ「要乘此機會窺探些消息」紀貫之集「人の家のすだれのもとに女出わたるに、垣の下に男立てせうそくいふなる、垣のつらに薄おほかり「いで」とふ人のなき哉花す、さわれをはかたとまねくなりけり」忠見集、井手に山吹ある家あり。をとこ籬に立よりてせうそくいはず云々」
 ○せうひん 「そな」を見よ。
 ○小便所 「こうか」を見よ。
 ○せがい 狹衣、一下四「硯を舟のせがいにより出て」同三上十「中のからのせがいに人のみえ侍りしかば」花鳥餘情玉萬「早船は體を多くたつるを云。船の兩方のせがいに、八てうも十てうも、むかでの手の如くたて、おせば、とくはしる也」後京極「船の中に照日のかげのすゞしきはせがいの水のこはる也けり」
 ○せがれ 「せつしや」を見よ。
 ○せきぞろ うばら 「節季をうろかし」の意の詞なるべきを、約めていふなるべし。日本歳時「七日十二 此月中旬より後、乞人共絳緋にて面をおほひ

せノ部

○誓言 法華經五勸持品十三「爾時藥王菩薩。及大樂說菩薩。摩訶薩與二萬菩薩眷屬俱。皆於佛前。

二頁八十一

又絳緋にて膝を蔽ひ、烏帽子を著せきそろといひていろく祝詞をうたひ舞ありくことあり。せきそろとは節季に候といふ意なるべく、都鄙ともにすることなり。斐織輪、四云月二節季候は諸國ニアリ。ウバラハ京師ノミアリテ他所ニナシ云々」是一種の乞食のみ。梨窓隨筆、二云「十二月風俗に、鄙支人節季候と云て、形を作る。其法赤色の覆面をかぶり、齒朶を戴きて、家の内に入馳走動轉する者あり。是又惡鬼を驅出す事を行ふ形なるべし云々」などあり。此意なるべし。いつ頃よりかゝる風俗ありしか其原始は詳かならねど、寛永十五年の印本、はなひ草に節季候の事見えたれば、其已前よりありしもの也。

○關取 關脇 小結 相撲の最手と云もの、三代實錄、四十九卷に見えたり。空穂物語、俊隆卷にも「すまひのほて」とあり。最手の意にて、今の世にはゆる關取なり。西宮記の相撲條に「最手額田成連。與三腋宇治部、利里、決三勝負」とある、腋は今いふ關脇也。小右記にも「常時腋也」とあり。又西宮記、江家次第などに「助手」とあるは、今い

ふ小結にあたるべし。さて江家次第に、すまひの事をいへる所に「特鼻禪上着狩衣差紐」と見え、古今著聞集には、烏帽子袴など着ながら、すそをくりてとりたりしやうに見えたり。然るに榮花物語、根合巻には「はだかなるすがたどものなみたちたるぞ、うとましかりける」とある、こはさうぞきたるに對へていへるにて、全くの素裸にてはあらねど、大かたにとりてかくはいへるなるべし。

○せきのひがし 關東 増鏡けふのひかげ「さても若清水のながれをわけて、せきのひがしにも、若君ときこゆる社おはしますに」同あすか川「此由をせきのひがしへの給ひ遣しける」

○せきわき 「せきとり」を見よ。

○せく 節供 空穂たごそ「五月五日になりて、せくともいとけうらに」

○せくつ せむし 新撰字鏡下に「降背背病也。世久豆」とあり。今もせくつともせむしともいふ。同書「倭加々留万又世久豆」宇治拾遺、七、をせく、同九「をせく、」

○せぐり 「たぐり」を見よ。

○せげん 女をかどはして、遊女家へ賣買する者を、せげんといへり。法華經五安行品十四の偈に「販肉自活術賣女色」如是之人比易親近」と見えし、此字を切出ていへる事ありしが弘まりたるか。せは女の轉訛と聞ゆれば也。同入觀發品廿八にも「術賣女色」とみえたり。

○世間鏡 梁簡文帝南郊頌序「異人俊又既簡出。而在官世鏡河仙亦離容而廊廟」

○塞子 堀川院初度百首、照射、權大納言公實「さつきやみ峰たつ鹿よ心せよともらのせこもみだれいるなり」夫木抄、八、百合、殷富門院大輔「夏かりのせこふみしだき分るのにしはれやすらんさゆりばの花」これらのせこは狩する時、獸鳥を追たて或は外へちらさじとてとむる人夫を云。塞子の謂なるべし。牧の馬を追出し捕を、かることいひ、その人夫をもせこといへり。

○せこぬす人 太秦牛祭々文に「僧坊乃中仁忍入天物取留世古盜人女」

○せさき 藤原爲忠朝臣集「みそぎ河瀬、先にいで、大麻にはらへる事を神もさくらん」

○施主 書言故事云「僧道稱施主曰檀那。梵語陀那鉢底、唐言施主」

○せじよやまんじよの鳥おひ 名物考に「或人云。今の乞食のうたふ鳥追と云ものは、清少納言が記に見えし、卯祭殿うつりといふ言葉の餘風也。御堂關白殿の御殿を作られしを祝たるうたひものなり。さるは元祿の比までは聲音もしづかにのどやかなりしが、其後大に變じたり」と云り。今案に、江戸の鳥追の歌に「せじよやまんじよの鳥おひが参りて」とうたふを、いかなる事かといふかしくおもひしに、京にのぼりて此鳥追の女のうたふをきけば「千町万町の鳥追が参りて」といへるにてしられたり。

是は「せんじゆまざい」をうたふ節博士に引れて、しか詠りたる也。すべて諷物にはふるくより、音便の語、又略語等の多かる、皆そのふしにひかれてしかるにぞありける。

○せゝくる 「せゝる」を見よ。

○せゝらぎ 菅家万葉、下「山河之淺杵湍良杵裳」林葉集、二「窓ならぬ谷のせゝらぎふみみつるをりもうれしなともすはたるは」小き溝をせゝらぎ

といふ。今もひなかにては溝をいふ。所によりてはせゝなぎともいへり。菅家萬葉、卷下「もみぢばのながれてせけば山川の淺きせらぎも秋はふかきを」万物語要訣六「不淨なる水をせゝなぎと云は、何の字ぞ。又片言歟。せゝなぎとは誤也。せゝらぎといふべし。瀆と書又潺湲とも書り。やり水の事といへり。白氏文集、悟真寺の詩に「去山四五里。先聞水潺湲。自茲捨車馬。始涉藍淡澗」と侍り。溝或は小川の事なるべし。あながち不淨の水をしもいふべからず。常に不淨の水の流れやらぬ所を云も、小水の心なるべし。不淨の義にはあらず。太平記にも「せゝらぎ水に馬のあしひやして」とあり。今ひなかにて云所は、遣ひ水を流す小溝をいひて、常の小流はいはず。又按に、右にしろしたる白氏の詩にて考ふれば、小流の水の音より出たる詞にて、今せゝなぎといふは此せゝらぎの轉語也。

○せゝくる せゝくる 物を持つあつかひ手まさぐるを、京近き國々の詞に、せゝるとも、せゝくるともいへり。袋冊子に、夜行途中誦文の歌「かたしはや堅磐也つかせゝくりにつかはしにくめよ酒手るひ足杖の誤歟

るひわれ酔にけり」盛衰記、三八丁「手取足取セ、リ倒シテ」今昔物語、廿七丁「續松ノ火ヲ以テ毛モナクセ、ルセ、ル焼テ」同、廿九廿七「母ガ幼キ子ヲセ、ラカス様ニ我エノト云テ」

○せたげる せたむる 今俗にせたげるといふ詞は、古雅にせためるといひしが、同韻轉じ誤りてせたげるとはいへる也。狹衣に「おのが身をとさまかうさまにも、せため給ふよ」と宇治拾遺、三「罪の輕重にしたがひ、うちせためつみせらるゝ事いといみじ」續世繼、藤なみ上「あつたにまうで、其大宮司とかをかなしくせためられなどしければと云々」せとは責にて、ためるは撓也。撓直の意なるべし。夫木抄、卅六、雜、後九條内大臣「あぢきなし身のためにこそ戀もすれ心せたむるわがなみだ哉」

○せたむ 宇治拾遺、卷三十七「炎魔の應にめされぬ。みれば多くは罪人、つみの輕重にしたがひてうちせためつみせらるゝ事いとみじ」夫木抄、卅六、後九條内大臣「あぢきなし身の爲にこそ戀もすれ心せたむるわがなみだかな」林葉集五「おのづからうちまどろめば打おこしいかにせたむるむねのお

もひぞ」落窪、一下廿「帶刀にせめとひ給うければ」今昔物語、廿六十二「事ヲ付テ責タメントシテ」盛衰記、五「袴木ニ懸テ打セタメ」同廿三「我ハ入道ニセタメ殺サレンズルニ」

○せたむる 「せたげる」を見よ。

○せぢ 年のはじめにはゆる振舞などする事を、節といふ。壬生忠見家集、ある所の屏風正月せぢとするとあり「春霞たつといふ日をむかへつゝ年のあるじと我やなりなん」

○折檻 しをり 人を折檻するをしをるといふ。伊勢物語に「女をこゝにこめてしをり給ふ」又「女をまかでさせてしをり給ふ」大和物語に「三郎にあたりける人、はくえうをして親にもはらからにもにくまれければ云々」しをりしてゆくたびなれどかりそめのいのちしらねばかへりもせし」とある、折檻に道の榮を兼たり。是にてしをりの假名なる事を知べし。落窪物語に「物なくはせそ、しをりころしてよ」とあり。

○拙者 やつがれ せがれ 俗間通用の語及往來の手簡等には、自己の事を拙者と云。これ國

俗の造語ならんとおもひしに、異邦にても用る事也。潘安仁が閑居賦、及び朱子文集にも拙者の字みえたり。甘露寺元長卿記にも、みづから拙者といへることもみえたり。今の世なま物しりの文に、我事をやつがれと云る事あり。賀茂云「僕字をもわれと訓べし。皇朝の古へ人は直き故に、虚言せねば貴人の自やつがれなど云が如き事はなし。然るに僕とかけるは、漢ぶみに倣へるなり。彼國人は卑下を甚しく書けれど、皆虚言ぞ」といへり。信にしかることなり今此訓をかうがふるに、やつがれは瘦疲の意なるべし。せがれといふも、瘦稿の義なれば也。近昔いたく世中亂れけるほどは、殊に何わざよりも、武勇の人を貴として、おのづから猛き子を望みけん故に、己子をば卑下してせがれとは云そめけん。倅とかくも倅倅の一字なれば其意也。

○雪駄 此名むかしはなし。建武年中舊記「於陳中可加制止條々之中一著屐付革駄屐之事」按に、此革駄屐と雪沓と混じて、一の物となりしなるべし老人雜話江村真齋「雪踏はもとよりありて、革を加ふるは、利休よりなりと云傳ふ」

通鑑、胡三省注「釘鞵以

○雪沓 ゆきぐつ 皮爲之。外施油蠟底者著釘

○雪隠 嗚呼矣草云「雪隠と云は、西土福州雪峰の義。存禪常に往て、掃除して是において大悟を得たり。故雪隠と名づく。佛の種子東に在を東司と云、西に在を西淨と云へり。唐山にも厠と云、厠と云、厠と云、後架と云。其餘いろ／＼雅名を付たり」

○せな 萬葉集、十四丁「問遠くの野にもあはなん心なく里の美中にあへる世奈可母」同二十「ゆふげにもこよひとのらる和賀西奈波あせぞもこよひよしろさまさぬ」同三十一「和賀西奈爾阿比與流等可毛」會根好忠集、四月はじめ「見るまゝに庭の草ばはしげれども今ばかりにもせなはさまさぬ」

○脊中 讀鼓典侍日記廿四「我方の女房どもよびよせて、ひたうに引のするやうに、人のせなかにおふせてやりつ」榮花物語、殿上花見「わたつみのかめのせなかにあるちかの山となるべき君がみよかな」林葉、二「夏深く野はなりにけりさいに出るこぐれの鹿のせなみゆるまで」榮花物語、月宴五十一「馬のせな」源氏物語、末摘花「をせなかにて」同花菱「か

うらんにせなかをしつゝ、字治拾遺七「をせくゝ、同九「をせくゝ、新撰字鏡云「春世奈加」同「儂加々万留又世久豆」夫木抄、十八、冬、俊頼朝臣「かづけつるわた引かけよさよすぎてむろへかへらんせなかくれに」夫木、廿三、雜、能宣「わたつみの底にねさゝぬうき島はかめのせなかにつめるちりかも」

○せなかあはせ 伊勢集「のけさまに君におはれし我なれやせなかあはせに人のなるらん」

○銭がさ 和名抄云「癖。説文云。癖音錢、俗云乾瘍也」

○せにかね 空穂、藤原の君「くひものなき人のためにとて、せに、きぬ、かね、車につみて出したて給ふ」

○せはし 堀河百首、松、俊頼「みさごゐるいそべにおふる松のねのせはしくみゆる世にもあるかな」

○せはしき 藤原爲忠朝臣集「春過て賤が麻衣ときちらしさばへせはしとすかく里人」

○せば道 頼政卿集「わぎもこがせばぢにちかやせめつらん吹くことに聲のわびしさ」

○せりあふ 「あせる」を見よ。

○せりうり 「あせる」を見よ。

○せろつばの味噌焼汁 そろば汁 大根を織りに切て、味噌を焼て糞とせしをせろつば汁といふは、織羅葡萄酒を訛れる也。近き頃は茶席にも用ひて、ソロバ汁などいふめる、いよ／＼甚しき誤也。

○脊をくゝめる 夫木抄、十九、雜、中務卿御子「久かたの天つみ空は高けれどせをくゝめてぞ我はよにすむ」

○線一寸に歌一首 當時の戯に火廻と云事あり。昔は脂燭の詩と云事あり。玉海「壽永二年正月廿五日辛卯。天晴。召中將於前。脂燭詩兩度令作。一度二寸開山花一度五寸竹間繁葉續世繼春のしらべ」歌をこのませたまひ、朝夕さぶらふ人々にかくしたいよませ、しそくの歌、かなまりうちて、響のうちによめなどさへおほせられて」とあり。

○千言萬語 薛文清云「千言萬語只在實」

○千古萬古 朱子語類云「千古萬古如何得知」

後撰集、秋下「風の音のかざりと秋

○雪沓 ゆきぐつ 皮爲之。外施油蠟底者著釘

○雪隠 嗚呼矣草云「雪隠と云は、西土福州雪峰の義。存禪常に往て、掃除して是において大悟を得たり。故雪隠と名づく。佛の種子東に在を東司と云、西に在を西淨と云へり。唐山にも厠と云、厠と云、厠と云、後架と云。其餘いろ／＼雅名を付たり」

○せな 萬葉集、十四丁「問遠くの野にもあはなん心なく里の美中にあへる世奈可母」同二十「ゆふげにもこよひとのらる和賀西奈波あせぞもこよひよしろさまさぬ」同三十一「和賀西奈爾阿比與流等可毛」會根好忠集、四月はじめ「見るまゝに庭の草ばはしげれども今ばかりにもせなはさまさぬ」

○脊中 讀鼓典侍日記廿四「我方の女房どもよびよせて、ひたうに引のするやうに、人のせなかにおふせてやりつ」榮花物語、殿上花見「わたつみのかめのせなかにあるちかの山となるべき君がみよかな」林葉、二「夏深く野はなりにけりさいに出るこぐれの鹿のせなみゆるまで」榮花物語、月宴五十一「馬のせな」源氏物語、末摘花「をせなかにて」同花菱「か

○せひなう無是非 榮花物語 楚王夢「たいせひなうこひしきに」

○せふみ 夫木抄、卅六、雜、參議爲相卿「日もくれぬわたせその馬ふちもなきこの人こはせふみせずとも」

○せむし 「せくつ」を見よ。

○せめぐ 古今集、雜上、としゆきの朝臣「老とてなご我身をせめぎけんおいすばけふにあはまし物か」

○せめぐる 古今集俳諧歌「枕よりあとより戀のせめくればせんかたなみそとこなかにをる」

○せめて 藤原元眞集「住よしのきしによすなる忘貝せめて戀しきけふぞよすなる藤原爲忠集「みづくのかきもつくさぬおもひをばせめては君が夢にてもしれ」

○せめらるゝ 古今集、壬生忠岑長歌「秋は時雨に袖をかし、冬は霜にぞせめらるゝ、かゝる怪しき身ながらに、つもれるとしを云々」

はもと後園に對へたる名にて、その栽る地をいひ又栽たる物をもいへり。藤原元真集「嵯峨のせんさいほる」「も、しきにうつしう」ともをみなへし我たづねこし心むするな」「こせの前さいほるとて」をみなへしあまたみすて、過ゆかばさかの、ころとおもふべきかな」中古より字音にいひならへり。古今雜下「風ふけばおきつしら波立田山」のうたの左註にせんさいの中にかくれて見ければ」後撰、春上のはし詞に「前栽にこうばいをうゑて、又の春おそく開ければ」伊勢物語、廿三段にもみゆ。河海抄桐壺の卷に「壺前栽清涼殿東庭并西庭朝餉并臺盤所前被栽」前栽。延喜元年左右衛門栽前栽」とあるをみれば、その栽たる草木の事なりけんを、やがて植る所の名に成しなるべし。

○穿鑿 後漢書卅四徐防傳「孔子稱述而不作。又曰吾猶及史之闕文。疾史有所不知而旨闕也。今不依章句。妄生穿鑿。以違師爲非義。意說爲得理云々」同五十蔡邕傳「以經籍去聖人遠。文字多謬。俗儒穿鑿疑誤後學」
○せんざし しりざし 賴政卿集「聲ばかり

仁六年四月癸亥。幸近江國滋賀韓崎。使過崇福寺。大僧都永忠護命法師等率衆僧奉迎於門外。皇帝降輿升堂禮佛。更過梵釋寺。停輿賦詩。皇大弟及群臣奉和者衆。大僧都永忠手自煎茶奉。御施御被御船泛湖云々」
○千人のさすところはたがはす 前漢書云「里

諺曰。千人所指無病而死」
○せんをつな 善綱 長稱寛正記「寛正四年八月八日の曉高倉の御所にて、御他界あり云々東山義政公御母公勝智院殿と號送葬の所に、將軍家もせんをつなを御肩に置せ給ふ。御孝養のつとめ懇也。御茶尾終りしかば、將軍家方丈に御入有て、淨衣を召かへ御道服にて御看經數刻也」

○千變萬化 梵辭云「千變萬化未始有極」
○千本通 京都の西千本通は、朱雀大路の東傍なり。れを千本と云しも久しき事也。後愚昧記「應安二年四月一日。入夜千本邊有炎上」とあり。
○千里同風 東披詩「須知千里事同風」
○千里の行は一步よりはじまる 老子經云「千里之行始於足下」大戴禮云「不積跬步無以致

通ふやりとのしりざしを猶たのみぬかなきこちす

○千秋萬歲 前漢書、五十二寶嬰傳「上從容曰。千秋萬歲後傳王」後漢書、五十六張綱傳「綱自被疾。吏人咸爲祠祀祈福。皆言千秋萬歲何時復見此君」
○千壽萬歲 せんすまざい 明月記「貞永二年正月一日。酉時許有弘孝弘等來聞之。金吾不參御藥。但早參可見千壽萬歲之由有仰事。東帶忿參其後可參所々云々」

○全盛 文選、蕪城賦「當昔全盛之時。車挂轉人駕肩」
○洗濯 古くは解洗衣といへり。萬葉集、七十三「椽の解洗衣」

○せんたな 小庭の御膳棚、禁腋秘抄「殿上の小板敷の前を小庭といふ中略下侍二間有。東はつまとなり。次一間しとみなり。二つにわりて、にしは下りて御膳棚を其所にたつ」とあり。禁秘御抄「供御四府等供。先例置御膳棚。後付御厨子所。近代只直付御厨子所。禁野交野等鳥同之鷹飼舍人進之」
○煎茶 類聚國史、三十一、帝王部、十一「弘

千里古今集の序云「とほき所も出たつあしもとよりはじまりて」とあり。
○せんろつばん 大根を細く切るをせんろつばんといふ。織羅葡の轉訛なり。

そノ部

○そうじて しのびね上「そうじて此大いどのは、御心さらしく花やぎたまへる人にて」

○俗語 後漢書五十蔡邕傳「其高者頗引經訓風喻之言。下則連偶俗語。有類俳優」

○束脩 世俗おしなべて弟子の師に餽るの禮を束脩といふ。されども鄧后記には「故能束脩不觸羅綱」注には「約束脩整」を以てこれを釋せり。又鄭均が語には「束脩安貧恭儉節整」とあり。馮衍傳には「主潔其行束脩其行」とあり。劉般が語に「束脩其行」とみゆ。これ皆躬の行ひを檢勸するの義なり。さらば論語の「自行束脩以上」とはよく躬を飭する者は教ふべしと云の事にてあらずや。又杜氏薦伏湛疏には「自行束脩訖無毀玷」注云「十五以上也」これも亦一説なり。因にしろし置

仁六年四月癸亥。幸近江國滋賀韓崎。使過崇福寺。大僧都永忠護命法師等率衆僧迎於門外。皇帝降輿升堂禮佛。更過梵釋寺。停輿賦詩。皇大弟及群臣奉和者衆。大僧都永忠手自煎茶奉。御施御被御船泛湖云々

○千人のさすところはたがはす 前漢書云「里

諺曰。千人所指無病而死」

○せんをつな 善綱 長稱寛正記「寛正四年

八月八日の曉高倉の御所にて、御他界あり云々東山義政

公御母公勝 送葬の所に、將軍家もせん義政の綱を御肩に置せ給ふ。御孝養のつとめ懇也。御茶毘終りしかば、將軍家方丈に御入有て、淨衣を召かへ御道服にて御

看經數刻也」

○千變萬化 梵辭云「千變萬化未始有極」

○千本通 京都の西千本通は、朱雀大路の東傍

なり。れを千本と云しも久しき事也。後愚昧記「應

安二年四月一日。入夜千本邊有炎上」とあり。

○千里同風 東披詩「須知千里事同風」

○千里の行は一步よりはじまる 老子經云「千

里之行始於足下」大戴禮云「不積跬步無以致

千里」古今集の序云「とほき所も出たつあしもとよ

りはじまりて」とあり。

○せんろつばん 大根を細く切るをせんろつば

んといふ。織羅葡の轉訛なり。

そノ部

○そうじて しのびね上「そうじて此大いど

のは、御心さらしく花やぎたまへる人にて」

○俗語 後漢書五十蔡邕傳「其高者頗引經訓風喻

之言。下則連偶俗語。有類俳優」

○束脩 世俗おしなべて弟子の師に餽るの禮を

束脩といふ。されども鄧后記には「故能束脩不觸

羅綱」注には「約束脩整」を以てこれを釋せり。又

鄭均が語には「束脩安貧恭儉節整」とあり。馮衍傳

には「主潔其行束脩其行」とあり。劉般が語に

「束脩其行」とみゆ。これ皆躬の行ひを檢飭する

の義なり。さらば論語の「自行束脩以上」とはよく

躬を飭する者は教ふべしと云の事にてあらずや。又

杜氏薦伏湛疏には「自行束脩訖無毀玷」注

云「十五以上也」これも亦一説なり。因にしるし置

ぬ。 ○そくとつく 盛衰記、十八「北面ノ者、其ハ

ナキカ。急ギンクト突ケト仰ナリ」

○そくひ 空穂物語開「白ききぬをぬひめ

はなくて、そくひなどして、みるのやうにして、一

をりひつ」枕冊子「心もとなき物、かたくふんした

るそくひなどはなちあくる心もとなし」

○そくび 盛衰記四「舍人ガソクビヲ突寺内ノ

外へ追出ス」

○龜言 維摩經三弟子品「默往阿難。勿謗如來

莫使異人聞此龜言云々」

○そこ 其所人にむかひていふ。 長明無名抄、上「そ

こなどは重代にうまれて云々」金葉集、雜上「賀茂

成助にはじめて逢て物申けるついでに略上とりよめ

る、津守國基「聞わたるみたらし川の水きよみ底の

心をけふみつるかな」

○龜相 そ、かし そ、げた 俗に心のう

はくとして、落つかず、そ、ろなるさまの人を、

そ、かしと云。言の意を考るに、古事記、上卷に「其

美人驚而立走伊須々岐」大殿祭詞に「夜女能伊須々

岐伊豆都志伎事無久」又源氏物語、朝貌卷に「西な

る御門を云々。驚てあけさせ給ふ。御門守寒げなる

けはひ、宇須々伎いで来て、速にもえ開やらず」又

榮花物語、か、やく藤壺卷に「曾々伎立て云々」狹

衣に「若宮おはして曾々伎ありき給ふ云々」此等の

伊須々岐、宇須々岐、曾々岐、皆普通ひて、何れも

静かならず騒がしく立走り過ちなどもあるべき行跡

を云て、今の曾々加之と同意同語也。又そ、うと云

て、龜相字をかくなども、本同語にて、是は直に過

都事になしていへる也。又髪髪などのほつるをそ、

げたつといふも、大殿祭詞に「取書計魯草乃噪伎

云無久」とある是にて、是又同語なる事は、萬葉十

六丁に「古部狹々寸爲我哉」とある狹々寸と音の通

へるにてしるべし。此に用ひたる所は、少年の比す

いろにうかれさわきたるよしを云なれど右の語ども

と終ひには同じ心の詞也。

○そ、かしう 源氏よこぶえ「いとそ、かしうは

ひおりさわぎ給ふ」かなる小兒の榮花初花「あるはそ、

かしげにいそぎわたる事」今昔、廿八「守返り來

タリケルニ、怪クモ女房共モス、ロヒタル氣色見エ

クレバ」ニオナロヒ 同廿九十五「只ス、ロヒニス、ロヒ

チ」源氏野分「そ、げたるしべなどの打まじるかし」

○そ、き 榮花物語浦々の別「よろづにそ、きた

てまつる」同、か、やく藤つば、九「そ、きたちて二

月つごもりに參らせ給ふ」狹衣、一下廿九「つきつ、

しうそ、ろなるかたちなどいとどいみじう」是も衣

のよきなりへ榮花物語初花、あるはそ、かしげにいそぎ

るやうなり」同五十五「そ、きたちて」源氏物語紅葉賀「い

わたるも」同五十五「そ、きたちて」源氏物語紅葉賀「い

つしかひ、なをしするてそ、きわたまへり」同東風

「そ、いめきありくに」愚管抄、卅五「そ、い、やきつ、

やきつ、」同同「ふと參りてそ、い、やき申て出にけり」

サ、ヤキ 盛衰記、三「澄憲更ニワ、カズメニ 舞翔テ」今

昔物語、廿六「一」藪ノ中ニ者ノワヨリノト鳴テ動

ケルヲ見テ」

○そ、げ 新撰字鏡云「善加彌曾々介」

○そ、げた 「そ、さう」を見よ。

○そ、げる そ、げたつ 髪などの垂かゝる

をそ、げたつといひ、物のはつるをそ、げるとい

ふ。大殿祭詞に「取書計魯草乃噪伎無久」と

○そ、つかし 「そ、さう」を見よ。

○そ、のかす 頼政卿集「心にもあらでやまねく

花す、きの秋の野風にそ、のかされて」保憲女集「秋

風のさむきよひまに萩のはにそ、のかされて人ぞこ

ひしき」

○そ、り 「ゆする」を見よ。

○そ、りふし 「そ、る」を見よ。

○そ、る、 そ、りふし それた 萬葉、十

七十四 越國立山長歌に「之良久母能。知邊乎於之和

氣。安麻曾々理多可吉多知夜麻云々」此曾々理は天

まで高く進み登れるを云り。虚空と云も、聳といふ

も、皆本同語也。今心を浮立進むをそ、ると云も、

是に同じ。又そ、りふしといふも、しかそ、る時に

うたふ諷曲なる故にいふ也。又「心のそれた」と云

も、物の浮立て反と同語にて、是は浮離れたる方也。

歌の詞にす、ろ、そ、ろなど云には、いろ／＼に活

かし用ひて、廣き詞ながら、其中の二種にそ、ると

同意なるもあり。

○そ、ああるき 藤原清正集「はし鷹のす、あ

あるきにあらばこそかりとも入のおもひなさめや」

○そゝろか そゝかし 新撰字鏡「惣會々呂加」

○そだ 「ほだ」を見よ。

○そだつる青 夫木抄、廿七、正治百首、土御門内大臣「おもへたすいめのひなをかひおきてそだつるほどはかなしき物を」拾遺集、雜賀、元輔「松がえのかよへる枝をとくらにてすだてもるべきつるのひなかな」契沖云、此すだてるより轉じて、そだてるともいふか。立音相通也。

○そち そちら 其方、其方などいふも、古言也。萬葉二四十一云「霞成會知余里久禮婆」

○そぢら 「そち」を見よ。

○そでがき 「なほくがき」を見よ。

○袖笠 おち窪物語、一之上「笠も取あへで袖をかづきてかへるばかりと笑ひたまふ云々」堀川百首、藤原基俊「はれくもり定めなければ初時雨いもが袖笠かりてきにけり」

○袖口 夫木抄、十九、雜、爲兼「大空にあまねくおほふくものそで袖口うるふ雨くだるなり」

○袖のつまずり 夫木抄、六、春、顯仲朝臣「東路のいかほの沼のかきつばた袖のつまずりいろごと

にみん」同十一、秋、後九條内大臣「わきもこが袖のつまずりいろごとにみだれてうつる萩のあさつゆ」

○袖まくり 夫木抄、卅三、雜、よみ人しらす「賤のめがつま木とりにと朝ゆきていろ／＼ころも袖まくりしつ」堀川百首、權中納言匡房「まくりでの袖にも戀のかくれぬは涙の色のしるきなりけり」

○そと そとも 後世外字をそと、訓て、内外とおぼえたるはひが事也。古は外は外とのみいひて、そとは背外なれば、後の方をいふ也。成務紀に「山陰爲三背面」萬葉一三十三背面乃國能真木立不破山こえて」などあり。

○卒都婆 夫木抄、卅二、雜、寂蓮法師「あさぢはらふるきそとばに契りおかんとなりとならばあはれともみよ」續拾遺集、羈旅「昔かつらき修行しける時のそとばの残りたりけるをみてよみ侍りける覺仁法親王」

○そとも 「そと」を見よ。

○そな 川せみ せうひん 綠色 武藏國幸手にて鷓をそなといへるは、古言の會邇の名の也。

○そねむ 後撰集、雜一「かたはらの女御たちそねみ給ふけしきなりける時」

○園をつくる 夫木抄、十三、秋、西行上人「しきはる秋のこすゑをみせぬかなへたつる霧の園をつくりて」

○そば 夫木抄、十三、秋、賴政「いもこふとまだはしちかきうた、ねの枕のそはにやどる月かな」落窪物語、一之下「これだに几帳たてたれど、側の方よりみいるれば云々」

○そば側 和名抄「蕎麥。孟詵食經云。蕎麥。蕎麥音喬。一音驕。和名曾波牟木。一云久呂無木」性寒者也」續日本後紀「仁明天皇、承和六年秋七月、畿内ノ國司ニ令シテ蕎麥ヲ勸メ種エシム。土地沃瘠ニカ、ハラズ、播種收獲トモニ秋中ニ出來、稻梁ノ外ニ食トスルニ足レルヲ以テ也云々。是蕎麥ヲ作りタル始也」蕎麥をそばといふは、其實に稜ある故の名也。和名抄に「唐韻云。爪椶木也。又四方木也。和名曾波乃木」とあり。字書を考るに、爪椶はもと木の名にあらず。木の椶也。然るに此字曾波の木に

なごり也。八十矛神の御歌に「蘇邇杼理能阿遠岐美那斯遠麻都夫佐邇登理與會比」とあり。所によりて是を川せみといふも、川會邇の轉じたる也。又畫工などの少微とも、せうびんともおぼえたるも、會邇會那等の古語の音便に類れ訛りたる也。和名抄に「爾雅集註云。鳩小鳥也。色青翠而食魚。江東呼爲水狗。和名會比」とあり。ソニ、ソナ、ソヒ、皆通音也。又此比より美に通ひて、川せみなどは云也。宣長云「青翠く美はしき鳥なれば、世に綠色と云も、翠鳥色の會を省るなり」といへり。

○そなくかすそ、のかすの誤カ 今昔物語、廿八四

○只振ヒニ振ヒテ頭ヲソナ、カシテ

○そなへ物 おそなへ そなふと云語は、不足ことなく具足して、満齊ひたるを云。神に供する物を備物とも御備など云は、神を敬ひし代に、神には必ずおごそかに備足て供りし言の遺れる也。大神宮儀式帳に「種々味物儲備仕奉」祈年祭祝詞に「種々色物乎備奉氏」などあるが如し。今は佛の供物にも云は、後に神の御上より轉じたるなり。又正月の饒餅をおそなへといふも、神に獻る方よりの詞

當たるは、物の稜角を會婆といふから、思ひ混へたる也。古事記神武の御歌に「多知會婆」仁德紀皇后の御歌に「椰素麻能紀」とあるは、漢名鬼箭といひて、四方に箭の如く稜角ある木也。故に今矢筈ともいひ、其葉の紅うるはしかれば、錦木ともいへり。枕冊子に、木はと云る中に「そばの木はしたなき心ちすれども云々。濃き紅葉のつやめきて、おもひかけぬ青葉の中よりさし出たる、めづらし」といへり。此文にはしたなき心ちすれどもといへるは、そばといふ名の角々しくて、よりつき心おきせらるゝよしの詞也。山の岨も准ふべし。

○側へもよらぬ 竹取物語に「つねにつかうまつる人を見給ふに、かぐやひめのかたはらによるべくだにあらざりけり」とあり。

○そばへる 犬などの人になつき戯るゝをいひ、又人の誇りおこれるにもいひ、又くらひそばへるなどもいへり。枕冊子三「つちありく童郎の、ほどくにつけてはいみじきわざしたると、つねに袂を守り人に見くらべ、えもいはず興ありとおもひたるを、そばへたる小舎人わらはなどに引とられてな

くもをか七」義經記「さても武藏は彼に打合、是に打合するほどに、咽喉うちさかれ血出る事限なし。尋常の人などは血解などするぞかし。辨慶は血の出ればいと血そばへして人を人ともおもはず云々」萬葉集、十三丁「伊蘇婆比座與伊加流我等此米登」今案に、此伊蘇婆比を近來阿曾婆比の誤とするなれど、然るべからず。伊は發語にて今世に云そばへといふ言と聞ゆ。

○そばへる 萬代集、冬、雨聲混波、堀河右大臣「あらしふくしぐれの雨のそばへてはせきのをなみの立空もなし」山家集上「はつ花のひらけはじむる梢よりそばへて風のわたるなるかな」枕冊子、三「そばへたることねりわらはなどに引とられて」

○そはり 「ひそくなく」を見よ。

○そびやく 字鏡「登」源氏物語松風いたうそびやく給へりしが、すこしなりあふほどになり給ひにけり」同少女、いますこしそびやくに、やうだいな

○そふ 夫婦連副、相副などいへり。古事記、黒田宮段に「二柱相副而」また明宮段大御歌に「牟

迦比袁流迦母伊蘇比袁流迦母

○そま かなかにて死たる馬をそまといふは、しにうまの約轉なるべし。此死馬をすつる所をそますて場といひ、それを食たる犬をそま犬といふ。

○ぞめき 方丈記「春耕し夏うゝるいとなみのみありて、秋かり冬をさむるぞめきはなし」今昔物語、廿八冊「落入ツル時ニ馬ハ疾ク底ニ落入ツルニ我ハ送レテゾメキ落行ツル程ニ」

○ぞめく 「ぞめく」を見よ。

○染付 東鑑、四十七廿四「染付三十端卷絹三十疋」

○そもじ 「そもじ」を見よ。

○そやす 今世の人、人をそゝのかすを、そやすと云言あり。昔の詞に萌豆を、そやしまめといへるも、豆を水に浸しあたゝめて、あざむき生すわざなれば、今云と同じ心ばへ也。拾遺集セ物名、そやしまめ、高岳相如「いざりせしあまのをしへしいつくそやしまめくるとて有といひしは」これを桐隠隨筆三に「そら豆也」といへるは、僻事也。(猶はやす)を参照せよ。

○そやつ 「やつ」を見よ。

○そよめく 貫之家集「たちよれば袖にそよめく風の音にちかくはきけとあひもみぬかな」曾根好忠集「萩のはに風のそよめく夏しもぞ秋ならねどもあはれなりける」

○そら某 空穂、藤原の君「京わらは敷しらすあつまりて、一のくるまをばひとる殿の人々そらさわぎすれば」落窪、一之下「立てありく空もなし云々」

○そらおぼれ 後拾遺、戀四、紫式部「おぼつかなそれかあらぬか明くれの空おぼれする朝がほの花」新古今集、戀一、馬内侍「さみだればそらおぼれする子規ときになくねは人もとがめず」

○そらごと 萬葉集、十一丁「十二丁」淺茅原小野にしめゆふ空言も」また十三丁「刈じめさしてそらごと」後撰集、雜二、よみ人しらす「雲のちのはるけきほどの空ごとはいかなる風かふきてつけん」拾遺集、雜、よみ人しらす「しらす雲のかゝる空ごとする人を山のふもとによせてけるかな」六帖、大たか「へをつけて山に入にしあら鷹のいとをきに

なげきけるころ」後拾遺集、雜、四「そらごと
○そらす放 大和物語「いかゞし給ひけんそら
し給ひけり」

○そらだき物 夫木抄、十四、秋、崇徳院御製
「ほしとのみまがへる菊のかをるかほそらだき物の
こゝちこそすれ」

○そらなき空泣 夫木抄、八、夏、よみ人しらす
「ちはやぶるたゞすの神の杜にしてそら泣しつるほ
とゝぎすかな」大鏡六十五代「花山院の天皇と申き云
々。歩み出させ給ふ程に、弘徽殿の女御の御文の、
日比やりのこして、御身もはなたす御覽じけるを思
しめし出て、暫しとて取に入らせ給ひけるほどぞか
し。粟田殿いかにかくはおぼしめし立ぬるぞ、只今
過なば自らさはり事出まうで來なんと、そら泣し給
ひける」公任集「里わかぬそらねときゝて子規たれ
たのいかいはいこたへむ」後撰集、十、戀二、女
につかはしける、よみ人しらす「天の戸をあけぬく
といひなしてそらなきしつる鳥の聲かな」拾遺集、
夏、よみ人しらす「聲たてゝなくといふともほとゝ

ぎす袂はぬれしそらねなりけり」此歌はし書にあ
やめのねをよせしよしみゆ。
○そらなげき 金葉集、戀下、よみ人しらす「は
かるめることのよきのみおほければそらなげきをば
こるにや有らん」
○そらぬ塵舞 源氏物語、花宴、たゆみなき御し
のびありきかなと、つきしろひつゝそらねをぞあへ
る」今昔物語、廿七四「虚寝ヲシテ臥タリケレバ」
○空譽 拾玉集、五「歌のよき事かたりしかば
此歌をそへたり、右大將頼朝卿「五月雨の絶まがち
なる雲のあひを空ほめする人にぞ有ける」このか
へしに申つかはす「君故に心はれたる身にしあれば
そらほめならぬそらほめぞする」
○そりが高い 金葉集、雜上、藤原時房「あづ
さ弓さこそはそりの高からめはるほどもなくかへる
べしやは」
○そりにのる 夫木抄、十八、冬、源兼昌「初
み雪ふりにけらしなあらち山こしの旅人そりにのる
まで」同、西行上人「たゆみつゝそりのはやをもつ
けなくにつもりにけりなこしの白雪」

○そりはし 空穂物語藤原の君、十七「池ひろし。
うる木あり。そりはし、つりどのあり」隆信集、戀四
「せんえう殿のそりはしに」源氏少女「らうわたどの
ゝそりはしをわたりて参る」夫木抄、十九、雜、西
行上人「さらにまたそりはしわたす心ちしてをふさ
かゝれるかつらぎの山」

○ぞれあひ 今女奉相對にて通じあふを、ぞれ
あひといふ。昔はとれあひとやいひけん。漢書に對
食の字をとれあひと訓たり。連合の通音なればその
意なるべし。漢書、外戚傳曰「房與官對食」應劭註
曰「官人自相與爲夫婦名對食」。房與官者二人名
也」

○それた 榮花、木綿しでの巻に「手にすゑた
るたかをそらしたる云々」今「氣がそれた」「心がそ
れた」などもいへり。(猶「そゝる」を参照せよ。)

○そらく へなく 出雲風土記、意字部
國引坐る條云「上畧三身之綱打挂而。霜黑葛開々耶
々爾。河船之毛々會々呂々爾。國々來々引來。 纒
國者自去豆乃打絶而八穗米支豆支乃御埼也云々」
此もそろは眞徐の意にて、今俗にそらくといふ語

に、眞の發語の添たる也。へならくも黒葛よりつ
いたるもて、今云と同語なる事しるし。猶此文の
總の考へは別に出せれば、こゝには省て引り。
○そん損 空穂物語、藤原の君八「くちをしう
ものゝつひえある事をかぞふれば、おほくのそんな
り」
○存 今奉存候など云存は、存在とつゞきて、
物のそのまゝに在を云。今思ふと云所を存するとい
ひて、奉存候などいふは、存知の二字の意なるを、
知を一字省きしより其義遠くなりつる也。但し存と
いひならはしたるも久しきことなり。明月記「嘉祿
元年十二月廿三日云々。答云。本自存此由不願涯分
可申入由。許讓退出云々」

たノ部

○たい 見たい、ききたい、いひたい、じれつ
たい、逢たい、などのたいなり。是は痛の上略にて。
痛なるを、音便にたいとはいふなり。音便の時、きの
いに轉するは、后宮ささきの宮を、ささいの宮、書
てを、かいてといふが如し。さて此たきといふをそ